小田原史談

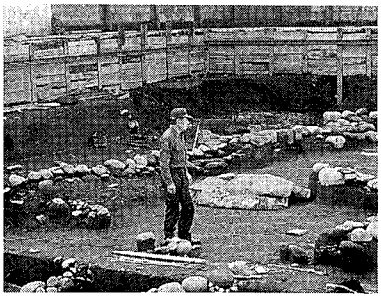
第 155 号
発行所　小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

西相模三ヵ所の遺跡発掘

北条時代の初めての道路跡と珍しいU字型空堀を検出

小田原

昨年九月より十一月にかけて小田原市本町一丁目一三番四七、四八号（旧・本町小学校南側）の発掘調査が、国学院講師青木豊氏を団長とする「小田原城下・中宿遺跡」調査団の手により進められていたところ小田原北条氏時代の道路跡と

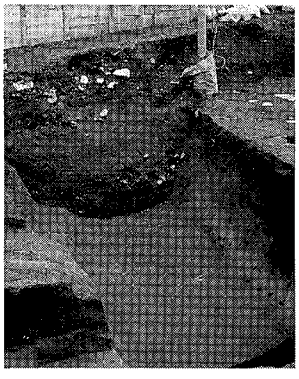


始めて発見の道路跡

U字型空堀の存在が初めて確認された。

道路は幅約五メートル。路肩に水路状遺構が見つかった。使用した丸石は、早川か早川寄りの荒久海岸あたりから運んだと思われる。

道路跡は、南側の東海道と北側の「新道」の間の一画で、江戸期に「虎や三四郎」と「西川屋源兵衛」の二軒の宿屋の裏庭があった



U字型空堀

が、永録十二年（一五六九）、小田原攻めの際に、北条方が籠城作戦をとり、戦況が膠着状態となり、業を煮やした武田軍は撤退に当り、北条方に打撃を与えるため市街を焼き払った折の痕跡。この焼失を契機として、新たな街並みづくりが始まったという見解がある。

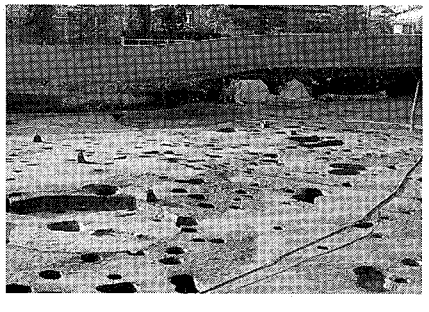
しかし、発掘され所が小範囲のため即断できない、という慎重な見方もある。

ともあれ、この地域の中世から近世にかけての、土地利用と、品々の流通を考察する上で大いに意義があると考えられている。

南足柄

縄文時代中期の堅穴住居址検出の塚田遺跡

市街地開発のため第二棟ビル建設が予定されている大雄山駅前の約四千㎡の地域（南足柄市関本字塚田五六九番地外）の調査が、昨年の二月から八月にわたって、安藤文一氏を団長とする調査団の手により進められていたところ、約四千年から五千年前の縄文時代中期中葉から後葉にかけての、堅穴住居址二十二棟を始め土壙・土壙墓・配石墓約三十基、それに多数の配石などの遺構を検出。また、遺物



大雄山駅前・塚田遺跡

として多数の土器・石器類や人面土器、カエルや鳥を模したと思われる獣面把手が出土した。なお、南に面した大雄山駅前道路寄りの未発掘部分が継続調査される。

山北

期待される河村城跡南面の湯坂地区の発掘

昨年十月より、山北町岸字土佐家敷（湯坂地区）地域の試掘調査が東海大学石丸熙教授を団長とする調査団の手により進められいるが、その確認結果が注目されている。

（岡部忠夫）

小田原叢談 (十五)

石井富之助

続・私の家の年中行事

七月十二日
草市。枝豆、稲、くり、はすの葉、おがら、そうめん、竹などを買い整える。

七月十三日
朝、精霊棚をかざる。きうり、なすで牛馬の形をつくり、はすの葉の上になすのさいの目切りを盛って供える。
夕方、おはぎを作ってあげ、寺へお参りしてきて後、門火をたいて精霊を迎える。

七月十四日
朝、白飯、なすのごまじる。昼、そうめん。夜、煮しめ。

七月十五日
朝、赤の御飯のおにぎりと煮しめを重箱に詰め、弁当仕立てにして供える。
昼は佛が外出のため、魚を惣菜に使う。夜、精進揚げを作り佛に供える。
この弁当は佛様が買物に出かけるためのものだそうである。どこへ買物に行くのかと聞いたら、神田へ行くのだと母はいった。佛様がるすになったすきに魚を食べて栄養をつけるというのはなかなかうまく考えたものである。

七月十六日
朝、茶飯、豆腐のあんかけじるを供えた後、浜へ精霊の飾り物を持って行って送る。
夜、大だいまつ。

九月彼岸
春に同じ。

十五夜
秋の七草。だんご十五、豆腐、さつまいも、くだもの等を並べた卓を縁先に出して月を祭る。
夜、煮だんご(芋、大根、だんごの味噌汁)を食す。

十三夜
だんご十三、くりその他の供え物は十五夜に準ずる。
夜、あずきだんご(里芋、だんごをあずきあんでくるむ)を食す。

十一月二十日
えびす講
朝、赤飯を福神へ供える。
夜、口取、さしみ、焼きざかな、うま煮、ちょこ、酢の物、吸物等を作り、知人を招いてもてなす。近所の子供にみかんをまき与える。
えびす講は普通十一月二十日であるが、互いに招いたり招かれたりするつごうもあって、わたしの家では十二月一日にきまっていた。
この日は朝早くから料理人が弟子を連れてやってきて、きんとん、ようかんそのほか全部の料理を作る。七、八十人前も作ったと覚えている。夜になると客がやってきて店にずらりと並び、福神に商売繁盛を祈り祝宴になる。ちょっとした婚礼の料理みたいのを家族、店の者全員に一人前ずつつける。

十二月八日
八日節句。一つ目小僧が山からとんでくるという。その魔よけに目ざるにひいらぎをさし、棒の先につけて立てる。
夜、赤の御飯とむしつ汁を神に供える。

十二月十七日
夜、飯泉観音へ参けい。帰りにだるまを買ってくる。

冬至(とうじ)
夜ほろふき大根(ごまみそ、砂糖みそ)湯豆腐を食べる。

十二月二十五日
餅つき。おろし大根、あずきあんでからみ餅を食べる。

十二月二十八日
餅切り。夜、しるこを神に供える。

十二月三十日
門松、お飾りをすませる。煮しめ、きんぴら、黒豆(しみこん、こぶ、はす、かんぴょうなどを入れる)数の子、口取等を作り、正月の用意をする。

十二月三十一日
大みそか。夜食にみそかそばを食す。すべて月のみそかには必ずそばを食べるのを例とする。

カット　内田美枝子

小田原のこま

お正月の遊びといえば、むかしはこま、羽根つき、かるた、すごろくとどこでも相場がきまっていた。しかし、一見同じもののように見えても、その土地土地で少しずつ違っていたようである。今考えると、小田原のこまにはたしかにほかと違った特色があった。

こまの遊びは普通はいっしょにまわして、長くまわっている方が勝というのがどこでもやる遊び方で、そういうこまを寿命が長いといった。もう一つ、じゃんけんで負けた方が先にまわし、勝った方がそのこまに自分のこまをぶっつけてつぶすという遊び方があった。この方がずっとおもしろいのでたいていはこれをやっていた。

ところがこいつに強いこまが出てきた。相手のこまをつぶすにはかねど――こまのまわりの鉄の輪のところをそういった――が厚く重いこまの方が強いにきまっている。そういう条件を備えたこまが出現したのである。おもちゃ屋で売っているのはかねどがせいぜい一センチぐらいの厚さのものだから、その倍以上もあるようなものにはとうていかないっこはない。

いったいそんな厚いのをどこで売っているのだろうと思ったら、実は売っているのではなくて、かじ屋へ行ってかねどと心棒を作ってもらい、それから木地物屋へ行って胴を入れてもらうという。つまりオーダーメードのこまなのである。

よし、それならこっちも作ってやれと大工町のかじ屋へ行って頼んだ。そのころはこれが流行みたいになっていたから、かじ屋も心得たもので子供が行ってもすぐ作ってくれた。いくらしたか値段は忘れた。

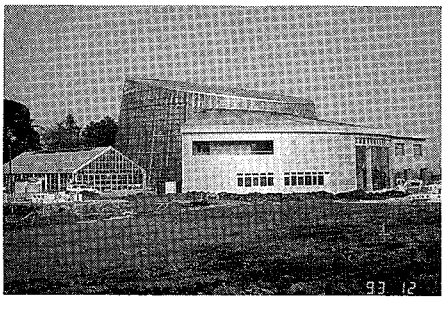
かねどと心棒ができると今度は十字町の木地物屋へ持って行く。こんな小さい仕事はどこでもやってくれるわけはないのだが、どこへ行けばいいということは子供同志ちゃんと知っていた。窓のそばでおじさんがろくろをまわしてお盆を作っていた。かねどを差し出して胴を入れてくれというと、「ちょっと待っておいで」といって、なお盆をひいていたが、まわる木地に刃があたると、シュル、シュル、シュルとみごとにけずられ、たちまち盆ができあがる。それがおもしろくていつまでも見とれていた。いよいよ、こっちの番になると胸がワクワクしてきて、息をつめてジッと見つめる。胴に心棒が入り、かねどがぴたりとおさまった時にはほんとうにうれしく、今度はそうやすやすとは負けないぞと心が躍った。

家へ帰ってきてまわしてみると、あのおもちゃ屋で売っているような細いひもではどうやってもまわらない。そこで店の者に麻で太くて短いのを作ってもらった。

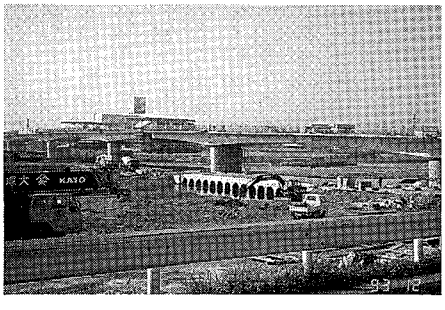
たった一つのこまにもこれだけの苦心をしたものであった。

こまといえば小田原でも平塚、藤沢などどこでも同じこまを使っていたと考えがちであるが、小田原のこまにはこういう特色があった。これは小田原には箱根物産の関係で木地物屋が多かったから、こんなことができたのであって、ほかの土地ではちょっとまねのできないことであったといってよいであろう。

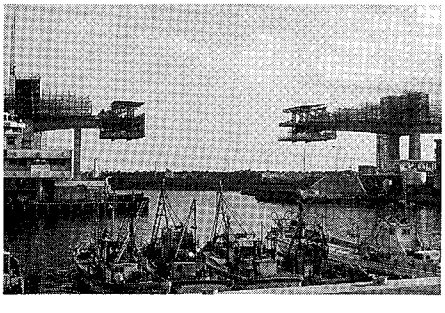
（続）



完成も近い久野・市立緑化センターの小田原フラワーガーデン・トロピカル



呼名も決った「小田原大橋」竣工間近か。左手後方建物は鐘紡小田原工場



小田原漁港を跨ぐ早川バイパス橋。開通平成七年の予定

遺稿

露国・日露の役俘虜のこと

八十七年ぶりのお礼 前編（五）

隠岐威重

また先に進み過ぎてしまった。戻そう。

第一回目の周航の決定は急だった。直ちに出航すべし、と当時の皇帝アレキサンドル二世は唱えるが、残念ながら、当時の露国にはその航海に耐える船は無かった。欧露には勿論シベリアにも無かった。

止むを得ずクルーゼンシュタインは旧学の地英国にその船を求めた。幸い航海に耐え得る二隻の古船を捜し当てた。装備品も、船員の衣服まで求めて乗組員に着せて乗船させた。

彼はどちらかと云へばこの周航を国威発揚、科学的探検に重点を置いたが、宮廷の考えは別だった。極東のカムチャッカ半島には毛皮が山と積まれ、それを捕獲する狩人達は飢え、壊血病で多く死んだ。猟人の死は毛皮会社、露米社の一大損失である。露米社の代表レザノフ、宮廷の高官レザノフ、彼の力と弁舌で皇帝、高官達も同社の株主になっていた。そこで利害が一致した。

宮廷はレザノフを国使として、日本を開国させ毛皮を売り付け、食料に変える貿易国にしようとした。レザノフは国書を持する国使、クルーゼンシュタインは二隻の船の指揮官でしかなかった。クルーゼンはレザノフを嫌った。私利と国益を混同する者として。クルーゼンの周航は成功した。彼の記する航海誌は広く西欧で読まれ、彼を世界一流の航海者と認めさせていった。

だが、レザノフは失敗した。出航の時、聖アンナ勲章と侍従の称号を得、皇帝の権威を身に付けた国使だったが日本の鎖国の壁は厚かった。幕府の扱いはケンモホロロだったのだ。長い間長崎の外港に止まって江戸から来た幕吏と交渉したが、幕府の答えは待つ間が長く挙げ句の果て答えはノー。国書は受け取らぬ、と答えてきた。

国書を受け取らぬ事は国際上非常な非礼になる事だが、それすら鎖国日本は知らなかった。極楽蜻蛉と云うべきか。

レザノフは落胆した。己れの会社の利益、己れの宮廷の権威の為に落胆した。落胆は怒りに変わった。露米会社の海のコザックに命じて樺太にある幕府の屯所を焼き討ちさせた。暴挙と云うしかない、この頃は露国も立派に成長していて、善悪の区別を付けることを知っていた。宮廷はレザノフの、露米会社の、この挙を暴と見做しレザノフを糾弾した。

根が小心だったレザノフは怯え、帰途陸路をとった彼はシベリアの僻村で淋しく死んでいった。

レザノフ個人の死はともあれ、第一回の正式に開国を促す露国の使いは幕府の上下を大きく揺るがした。続いて数年後露国は第二回の周航を企てた。ゴローニン、リコルドのそれである。両人が途中日本に立ち寄った目的は同じだった。

この周航に使った船は露国製であった。総ての装備も自国製だった。数年前には国中何処を探しても外航に耐える船はなかったが、僅かの間に自国製で総てを賄う国力、製造力を付けて来たのだ。

国と云う集団は力が付き出すと加速度的に力を増すと云うよい例だ。

ゴローニンはロシア平原の中央の村落貴族の家に生まれた。孤児になり、親戚に預けられ、後海軍兵学校に入った。

当時の兵学校は兵術の外、あらゆる科学、政治、経済、文化、世界の諸々のことを教え、一流の文化人、教養人を作っていった。

後にゴローニン、リコルドも選ばれて英国に学んだ。選ばれたロシア士官達は、他の一流文明国の若い知識人に遜色なく、自立、倫理、マナー、強い知的好奇心と洗練された聡明さを備えていた。

この第二世界周航も日本に対する強い関心から極東に来た。ゴローニン達が乗るディアナ号はカムチャッカの港ペトロパヴロフスクで冬を越し春になると南下しクナシリ島迄来た。その島で幕吏の謀略にかかり上陸したゴローニンは捕らえられた。先のレザノフの命令によって露米会社の海のコザックが樺太の屯所を焼き討ちした報復だった。

艦長ゴローニンを失ったディアナ号は止むを得ずリコルドが代理をして北行カムチャッカに向かった。その帰港の途中、北行する日本の千石船を捕らえた。その船に乗っていたのが高田屋嘉兵衛であった。

淡路島の生まれの嘉兵衛は大阪から瀬戸内を抜け下関から日本海に、陸地を見ず沖乗りして蝦夷地に向う航路、北前船の途を開いた。沖乗りの反対を磯ぜりと云う。陸の山形を見ながら方角を知り、陸地沿いに行く航法で、磯ぜりは小舟でも可とした。これに比べ沖乗りは早いが危険を伴う。沖乗りは大船を必要とする。千石船だ。当時鎖国時代、黙認限度は千七八百石とか。

蝦夷地からは鯡の干乾・昆布を、内地からは米・塩・俵・日用品などを運んだ。嘉兵衛は北面の航路を開い

て豪商になると同時に、捕らえられた当時は幕府の嘱託も兼ねて南千島の番所の監督もしていた。嘉兵衛は人望が厚かった。幕吏にも、配下にも。その嘉兵衛が報復として捕らわれたのだ。ゴローニンと殆ど同時に、日露の別はあるが。

でも、考えてみれば幕府は無茶なことをしたものだ。戦時でもないのに、異国の船長を逮捕してしまうとは。戦いになっても止む得ないことだが、幸か不幸か、当時欧露ではナポレオン軍に攻め立てられ極東どころではなかったので大事に至らなかった。

だが、捕らわれた二人には、露側には、『日本幽囚記』なる世界的に知られた著書を、嘉兵衛には口述書だが「遭厄自記」なる文を後世に残す機会を与えた。嘉兵衛がカムチャッカの僻村ペトロパヴロフスク港に連行されて見たことを記した文に、当時の露国の、いや、以後永い露国の姿勢を示している。

港の背後の小村には陸軍の部隊が大砲二十門を備えて駐屯していた。毎日その砲を引き出し錬え、小銃の習練も怠らなかった。ただ、この半島は、無人の荒野と牙をむく荒海があるだけで、攻めて来る人も国もないのに、と嘉兵衛は記している。

それに比べ日本は無防備なのだ。奇計で国後島でゴローニンを捕らえたとはいえ我が国は徹底的に非装備だったのだ。それをクルーゼンシュタインは彼の周航記に指摘して記している。日本を代表する開港の地長崎ですら、欧州の僻村に違わず一隻の軍艦と少数の手勢で簡単に陥ることが出来ると記している。まして北限の蝦夷地、千島には大砲一門すらないのだ。嘉兵衛はそれを知っていて驚いたのだ。

露人の大砲に対する偏愛、その威力により大シベリヤを手に入れた歴史を見れば分かることだが、過剰な武器に対する熱愛、過信は、その長い歴史の時間が彼等の骨の中に深く、多く沈澱し、その国の、民の体質にまでなっていったことは忘れるべきことではない。

だが、幸いなことに、この事件は解決した。ゴローニンと嘉兵衛は、自艦と自陣に無事に戻った。

プチャーチンの周航はゴローニンから四十五年後だ。プチャーチンも日本に開国を強いる目的だったが、残念ながらペリーに初開国の名誉を先取りされてしまった。一ヵ月の違いだ。露国の対日折衝は非常に丁寧だった。露帝の訓令どおり穏やかだった。その柔和さがペリーに先を越された。ペリーは土足で江戸湾にまで押し寄せ、武力をちらつかせて、鎖国の重い扉を無理無体に開かせてしまった。

幕府も国内の世論も歴史始まって以来の恐慌に陥ったことは承知のことだ。

「東洋人（日本人）は威嚇と恫喝に弱い」。誠に不名誉なことだが、その習わしは今日でも尾を引いているように思えるが如何。

プチャーチンは永年の問題の条件締結は出来たが、クリミヤ戦争の余波で手続きに手間取り、伊豆半島辺に居る時、津波で船を破られ沈み、伊豆戸田（へだ）の船大工に我が国初の洋船建造の栄誉を担わせた。回りくどいことを云うが、戸田の船大工達が、旧艦より少し小振りだが、立派に露艦を造り上げたのだ。今日戸田にはそれを記念する小さな博物館が静かな入江の脇にある。

露国の三回の周航をくどくど述べたが、その目的の大きな一つが我が国を巡る事柄で、露国と我が国との、小さくはあるが小競り合いにまで接近してきた。肌をこすり合うようになって来た。

今までは露国側から多く見て来たが少し我が国の側からも見よう。話を進める上で時間軸、年代順にその触れ合い、接触を誌して頭を整理しよう。

一六七五年、清国に使いしたニコライ・スパハリーと云う露国の官吏が、清国の東方に浮ぶ島国があることを知らされ国に報告した。この報告が正式に我が国の存在を露国が知った始めである。日本で云えば江戸時代水戸黄門の時代である。

一七三九年五月、「日本への航路を求めよ」の命により、ベーリングと並ぶ航海家のシパンベルグがカムチャッカの港を出た。仙台沖で漁民、藩吏と海上で会う。彼が日本人を見た最初の露帝の役人である。彼はそのまま北の海に去ったから航海としてはたいしたものではない。

年代が前後するが、一六九九年、大阪の質屋の若旦那伝兵衛が、他家に奉公し、江戸からの荷の海上輸送中難破してカムチャッカに漂着した。これを半島の征服者アトウラソフが知り報告した。

伝兵衛は優遇され、モスクワに送られピョートル大帝に拝謁を許された。後イルクーツクに送られ、其の地に日本語学校設立に及び、その教官となる。日本では元禄十五年、赤穂浪士討ち入りの年だ。後年薩摩の漁師の漂流民ソーザ・ゴンザの二人がペテルブルグに開設された日本語学校の教師になった。ただし、彼等の薩摩弁がひどく、後世その教本を見ても理解に苦しむ。

（続）

三月十日
東京大空襲を顧みて（六）

松本巽

㈱ 昭和二十年三月十日

戦闘体制が解除された。

民間の警戒警報も解除された。司令部より情報が伝えられた。

敵機は、日本の対空砲火を恐れ、房総半島五十キロ地点より撤退したとの事であった。

私たちは、陣地を離れ、軍装のまま兵舎で仮眠した。疲れているので、ぐっすり眠った。

それから一時間ぐらい眠ったか、けたたましいベルの音で飛び起きた。「戦闘体制ニ入レ」の合図だ。三月十日の何時頃か分からなかった。

続けざまに「射撃準備」と、マイクを通じて中隊長の命令が発せられた。（以上前号）

月島方面から空襲警報のサイレンがかすかに聞こえる。私たちは、掛けた毛布を蹴りあげ飛び起き、兵舎から陣地にまっしぐらに駈け出した。

既にB29は上空にあり、爆弾や焼夷弾を盛んに投下している。

無我夢中で鉄帽（鉄兜）をかぶる暇がない。五十メートル先の陣地に突っ走った。

よく爆弾に当らなかったのが不思議だった。

陣地は埋め立ててあまり年が経ていないので、地面は砂地で軟らかく、焼夷弾は土の中で不発となり、直撃を受けない限り大丈夫であったにせよ……。

私たち大隊二十四門の高射砲は一斉に火を吹いた。

しかし、突然の奇襲を受け、各分隊は、右往左往統制がとれず盲滅法の射撃である。

中隊六門が同一の照準で操作しないと十分な効果が得られないのだが。

B29は、高度三千メートルで上空を旋回していて、射撃には一番難しい角度で飛んでいる。

そのうち、私たち陣営は立ち直ったが、拡声機は故障で使用できない。中隊長の号令は、爆音と強風でかき消され聞こえない。算定具の指針に従って発射を続けた。

……

敵機撃墜

主翼の片翼が燃えながら、第三分隊のすぐ傍に落下、危うく直撃を受けるところだった。

そのうち弾丸は無くなる。大空襲に備え、今まで節約して弾薬庫に貯えてあった弾丸は空となった。他の中隊へ取りに走らなければならなかった。

敵B29による波状攻撃は三時間位続いたのであろうか、唯敵機を迎え撃つに懸命だった（大本営発表によると、その間二時間四十分）。

だが、さしも優秀さを誇っていた、わが中隊の撃墜数は三機だけだった。

その間、わが中隊が発射した弾丸は三百発を超えたと思われる。

東京湾岸に布陣した高射砲隊の砲は、百門はあるだろうといわれるが、撃墜したのは、何機でもなかったといわれる。

東京湾上に展開した照空隊は、艦載機の攻撃を受けほとんど機能を発揮することは出来なかった。

月島、深川方面は、焼夷弾の投下で、しかも北北西の強風にあおられ火の海で、三日三晩も焼け続けた。そして、焼け跡は、黒煙につつまれ、昼間でも夜の様に暗かった。

ともかく、月島、深川方面が最も悲惨の状況におかれたのである。

私が直接確認した訳ではないが、公用外出した兵隊の話によると、十号陣地より見える所にあった、石川島造船所では、徴用工員が宿舎で寝ている所を、突然の空襲で大量の焼夷弾を落とされ、死体が山のようにあった、という。

空襲警報の発令は、三月十日の何時頃だか分からなかった、と先に記したが、調べてみると、警視庁消防部の三月十日の記録では、

警戒警報発令…三月九日　午後十時三〇分
空襲警報発令…三月十日　午前零時十五分
空襲　同零時八分
同解除　同二時三十七分
警戒警報解除　同三時二十分

とある。

後で聞いた事だが、市民は、空襲警報で目が醒めた時、すでに自分の家も近所の家も燃えていた、という事である。

空襲は、このように空襲警報発令前に始まっていたのであるが、調べてみると、大本営は、空襲は三月十日零時としていて、警視庁消防部の記録と違いがある。

従来、防空隊には、空襲のため飛来のB29が本土より百キロメートル位離れた海上にある時、戦闘体制が発令される。五十キロメートルに接近した時、射撃準備が指令されるのである。

民間では警戒警報が発令され後に空襲警報が発令される。

民間の警戒警報発令時に防空隊は、戦闘体制に移る訳である。

ところが三月十日の空襲では、防空部隊は一気に射撃準備体制の指令が出され民間では直接空襲警報となった。

空襲警報が遅れたことについて、一説には、東部軍参謀が天皇の就寝を妨げることはおそれ多いと、空襲警報の発令をためらったためである、というが、果してそうなのであろうか？

ともかく、昭和二十年三月十一日発表の朝日新聞の記事には、現在まで判明せる戦果は、撃墜十五機損害を与えたもの約五十機、我が方の損害死者八万以上、行方不明多数、被害戸数二十三万三千戸、と発表していた。アメリカ側の発表は来襲したB29三百二十五機損害十四機。

その後の調査で分かった事だが、敵B29は、最初高度一万メートルで房総半島五十キロメートルまで接近し、すぐ撤退するかの如く見せ本土を遠く離れ、警戒警報が解除され軍も市民も寝しずまった処、突如三千メートル乃至四千メートルで房総半島より侵入した。

空襲警報も警戒警報も解除され、明るくなった朝、撃墜したB29の主翼の片翼が火を吹いて落下した地点を見に行った。

エンジンは火を吹いて落下したが、その片翼は原型をとどめ、胴体の一部は付いていたが、胴体そのものは、どこに飛んでいったか付近には見当らない。

しかし、どういう訳か、機内の計器類は、ほぼ原型で散乱していた。また、搭乗員所持の拳銃二挺、金の懐中時計一個、また、機内に備えてあったと思われる魚釣道具と、不明な器具等が原型のまま散ばっていた。

撃墜され捕虜となったB29の搭乗員の証言から、釣道具は、B29が故障で洋上に不時着した時、魚を釣り食料とし、不明な器具は、海水を濾過して飲料水とするもので、救援を待つ間に使用する為である事が分かった。

濾過器は、正確な大きさは分からないが、四十センチの四角で厚さは十センチ位であったと思う。今考えてみると材質は、ポリエチレンのようなものであった。一方の角に海水に付ける管が着いており、一方対角線の角に口で吸うように管がついていた。

実際に海水につけて吸って見たところ、多少塩分はあるが、飲むことが出来る状態で、内部はどういう構造になっているのか分からないが、ともかく驚くべき技術であった。

これら釣道具や濾過器、それに撃墜して海岸に漂着したB29搭乗員の装備品などは、ガラス戸の長さ三メートル位、高さ一メートル位、奥行三十センチ位の陳列棚に鹵獲品として、終戦まで中隊に飾られてあった。なお、陳列棚は、建具屋であった山田という一等兵が、空襲の合間を見て作ったものである。

また、兵隊たちは主翼の片翼に張ってあるジュラルミンを剥いで、空襲の合間に煙草のケースや箱などを作ったりした。

B29搭乗員の遺体は、兵隊の中に僧侶がいたので、お経をあげ、古材を用い荼毘に付し、陣地の西の空地に懇ろに葬った。

また、火焔にあぶられ川に飛び込んで亡くなった市民の遺体が海に流れ、十号陣地の浜辺に漂着した。私達は、その都度引き上げ、空襲の合間に集めた材木で荼毘にして、砂浜の一カ所に仮埋葬した。兵の僧侶が読経したことはいう迄もない。しかし、次第に材木も無くなり、火葬も出来ず、そのまま埋葬した。勿論、住所氏名は分からなかった。

私には、三月十日の空襲で行方不明となった深川の叔母があった。

それも、空襲が始まって四カ月たった三月末の頃、はじめて外泊が許可され、家で両親に聞かされてからである。外泊が許されたのも、私に替わって操作出来る初年兵の照準手が育ったからである。それまで私には交替要員がいなかったので外泊の許可はなかった。

叔母は私の母の妹で、叔母の連れ合いは若くしてなくなり、二人息子と米屋をしていた。しかし米が統制で配給制度となり、二人の息子は召集を受けたため店を閉め、娘二人と暮していた。私は、本土空襲がまだない頃の外泊では、帰隊する時間をみては、よく立ち寄ったものだった。

叔母は娘と手をつないで逃げたが離れ離れになって、叔母だけが行方が分からなかった。

私は、漂着する遺体を引揚げる度に叔母がいないかと注意した。また、初年兵教育に当った日は、他の兵隊に頼んで、五十歳位の女の人が漂着したら知らせてくれと頼んでいたが、見つからなかった。終戦後も不明のままだった。

遺体の漂着は五月頃まで続いた。

搭乗員の捕虜の証言から分かった事だが、三月九日夕方日本本土から二千三百キロ離れたマリアナ基地を発進したB29は、高性能焼夷弾を積めるだけ積んで、目標は隅田川を中心とした下町地域に一平方マイル当り（一マイル約一・六キロ）六十トン以上の焼夷弾をたたき込めと命令されたという。

私達が米軍航空機の種類性能等について教育された事を思い出すと、B29は、全長三十メートル、翼幅四十三メートル、積載量四トン（最大積載量九トン）、乗員十二名という事だった。

この夜間低空爆撃の東京大空襲で戦果を収めたB29は、その後も、夜間低空により、全国の主だった市街地・工場を攻撃。日本全土は焦土と化したのである。

この三月十日の空襲で大きな被害を出したのは、性能のよい電波探知機が無かったにせよ、B29の進入の最前線にある防空監視所が米爆撃兵団の作戦に騙されて、早く敵機を発見出来なかった事と、各防空隊の監視班

が、B29から焼夷弾を投下する迄知らなかったという軍の怠慢にあったと云わざるを得ない。

この東京大空襲で、早くB29を捕捉し、高射砲隊が待ち受け、その威力を十分発揮し、敵に甚大なる損害を与え撃退していたならば、死傷者数も少なかったであろうし、その後、日本各地の空襲を最小限にとどめる事が出来ただろうと思えば、返す返すも残念である。

（続）

材木屋綺談　その十

たかた・きくせん

彫刻材が交友録

木彫の材料には檜楠が多く使用されているので、銘木を扱う材木屋には彫刻に適当な木材を求めに彫刻家の先生方がよく訪れた。杉檜松のような針葉樹は夏目冬目の固さが異なるのでノミ切れが悪くて骨が折れる。ちなみに夏育つ年輪は材質が柔く、冬育つ年輪は材質が固いので私達業者は夏目冬目の言葉を屢々使用するのである。

そこで木彫に最もよく使用されるのが楠材である。楠はノミ切れもよく、夏目も冬目もほとんど同質であるからだ。しかも少し大型の彫刻の材料は、芯を去った大口径の木材で節の無いことが条件だから、直径一メートル以上の丸太でないと芯去りの無節のものは採れない。従って木彫の材料は通材が少ないのである。幸い私の家では楠を多く扱っていたので、彫刻家の訪れが多かったのである。

小田原に在住した有名な牧雅雄氏にも買って貰ったことがある。彼の作品には「軍鶏」が多く、小田原の好事家の処では今でも見ることが出来る。牧氏は彫刻だけでなく、文芸の分野にも足を入れ、北原白秋や白秋を取り巻く小田原の詩人作家と盛んに交流した。城址公園に在る北村透谷文学碑のデザインも彼の手になるもので非常に斬新な姿をしている。

小田原出身の片野不空蔵氏もよく来店した。彼の本業は染物業だが、如何にも芸術家らしい神経質な風貌をしていた。今でも毎年開催される久野東泉院の秋の展示会にゆくと彼の作品を見ることが出来る。

その外小田原北条時代の「いもじ」の伝統を受けつぐ鍋町の柏木家の一人、康兵氏もよく店に見えた。康兵氏が購めた「銀杏」の彫刻材は彼の手によって可憐な白兎に変身し、銀杏の樹肌の白さと温かさが何んとも言えなく優雅であったことを今でも忘れられない。

その頃、私の店に三日にあげず遊びに来ていた小倉清谷氏は久野の農家に寄寓して新聞配達をしながら彫刻に精進していた。ある時彼は「高田君の顔は凸凹が深いから勉強の為にモデルになってくれ」と言う。そこで夏の一ヶ月を彼の為に裏庭でモデルになった。これは木彫では無く彫塑である。私は毎日仕上ってゆく私の顔を見るのが楽しみで、彫塑とはこのようにして作るのかとよい勉強になった。

以上の人達は今は他界したり、小田原を去って行ったので私の追憶の中だけに生きているのであるが、今も健在の彫刻家横田七郎氏は度々店を訪れて楠材を買って貰った。私はその作品をいつも拝見している。氏は彫刻の外に版画も手がけられ、その作品も数多く拝見して感嘆している。私は戦後は銘木類はやめて建築材一本になったので彫刻の先生方とは疎遠になったが、昭和四十七年、当時私が会長をしていた県立小田原城東高校同窓会が母校の創立五十周年にあたり、記念事業として記念像を贈ることになった。そこで私は横田七郎先生にその作成を依頼した。

先生の手になったブロンズの記念像は人物像ではなく、先生ご自身の発案になる、古代中国の金石文字からヒントを得た「愛」という文字の立体像である。文字をモチーフとしたユニークな彫刻は日本には外にない。私はこの記念像の前面に悪筆を覚悟して「愛」の文字を揮毫(きごう)した。

彫刻材を縁(えにし)として多くの彫刻の先生方の知遇を得たことは材木屋を廃業した私にとって、いつまでも心温まる想い出となっている。

「高田君の首像」小倉清谷氏作

虜囚記（エラブカ・ラーゲル）

思い出の一日

文と絵　藤野　明

K君と二人でドイツ人二人に伴われ、貨物自動車から降りた。

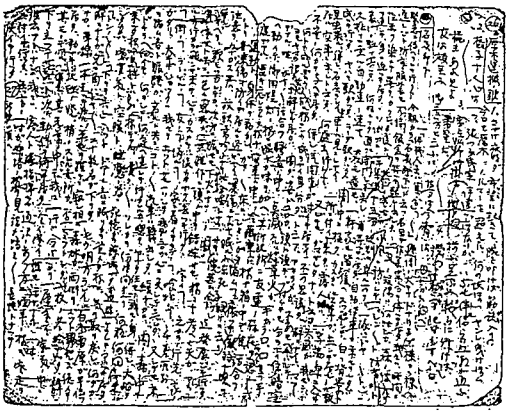
そこは我々のエラブカ・ラーゲル（収容所）に関係のあるソ連老職員の家であった。

丸太で組んだ古ボケた家々、それらは波止場街道を挟んで雑然と立ち並んでいた。

食べ物の少ない我々にとって喰気をそゝる様な豚が餌を探して、雨上がりの泥庭に足を引っこ抜いている。

猫と小犬が意外な我々の訪れに珍し相に駈けづっている。

穫り入れた馬鈴薯が田舎風らしく軒下にバラ積みされている。くぐり戸を通る様な格好で四人が狭そうな家の中に入り込んだ。



ソ連から持ち帰った筆者の記録

「ドラストヴィッチ」「ドラストヴィッチ」薄暗い一隅に家のマダムを見出したので挨拶を交わした。

四十を過ぎたかと思われるブク肥りのマダムに案内されるままに次の部屋に通された。せまく苦しい部屋を夫がやり場なさ相に片付け始めた。

ゲルマン（ドイツ人）と何か話し合っている様子に「ハハー、ペチーカ造りだな」と感付かされるように、両手で語り、寸法をとっていた。

此の国に住んで十一ケ月、望みかなって初めて見るソ連の家庭に、私の眼は物珍しく隅からすみまで見逃さなかった。応接間兼居間兼書斎の様な部屋は、少しの無駄なく、道具類が置かれている。

古き時代の遺物としか思えないランプが美しいガラス模様の笠と共に奇麗に手入れされている。

北の国なればこそ、一層珍しいゴムの小鉢。不格好な置きものが、ほころびかかったテーブル掛けの上に置かれている。何となく日本の長持ようの大きな箱もある。簡単に花模様を刻んだ洋ダンスの抽斗（ひきだし）が、あわただしく詰め込まれた後を残して一隅に坐っている。視線の走る儘に、壁の写真に眺め入った。

大きく写されたロシア娘、それは軽く微笑をたたえ奥ゆかしい幸と、女神の様なやさしさに満ちている。

私は丁寧に尋ねた。

「セストラー　マダム　パジャルスター　スカジーチェクトエイト（奥さん一寸おたずねしますが、これはどなたですか）」「私です。二十二才の時ですよ」余りの意外さに私はシワだらけのビール樽のご婦人と写真とをしみじみと見比べていた。

「オーチン　ハラショー（大変素敵ですね）マリンキー　イエス？（子供さんいますか）」と夫婦しかいない此の家庭の静けさは更に続いた。「ニエト　カプート（いいえ居ません、死にました）」手の掌を前に重ねて、静かに在りし日の楽しさに思い馳せる様に目を閉じた。

意外なことだけに私も寂し相な表情を作ることを忘れなかった。

ロシア革命とともに教会の鐘は消え、信仰を取り去られねばならなかった。この国の人達の心中を汲むに余りにも十分な光景に打たれていた。

私はこの寂しそうな雰囲気を消すように次から次へと眼を移した。

若き頃の夫婦の写真、会合らしき時の写真等々私は何か展覧会でも見るような物見高さと気軽さで見入っていた。

その間にもペチーカ作りは、やがて来る冬の暖かき生活の為にはかどっていた。

日本のような押し入れのないこの家造り。私の眼に映る全ての物、それは此の家庭の財産の全てであると言う事が一見して分かった。

古びて目新しい物もなく、もっと何か家財道具が並んでいても良い様な、否むしろ何か物足りなさを感ずる私の眼には腑に落ちないものがあった。

ああ、これが此の国の物のない姿であろうと独りでうなずいた。

婦人が板を二、三枚かかえて外へ出て来た。ああ、いるいる南京虫が沢山、婦人も目を細め見ている。

「プロスキー　チトエイト（ロシア語でこれを何といいますか）」と尋ねた。

「エト　クラープカー（南京虫といいます）」「ヤボンスキー　ナンキンムシ　ポニマイユ（日本語では南京虫といいます。分かりますか。）」婦人は難しそうな顔をひねって

「ナーキームシ」「ニェニェ　ナンキンムシ（いいえナンキンムシです）」

と分かり易い様にいい返し

た。「ナンキンムシ」「ダ、ダ（ああ、そうです）」

婦人は新しく日本語を覚えた嬉しさに、喜々と反復しながら、夫の所へ駆け込んでいった。そして、この新しい知識を分け合って爆笑していた。

銀杏のような黄ばんだ木の葉が所狭い様に敷き詰められている。九月末頃の数日の寒風が急に晩秋に追い込んで了ったようだ。昨年虜の身になった頃も、こんな秋景色だったかなー。郷土も今頃は、こんな寂しさかなー。

廻り来ぬ虜心寒しく落葉ふむ

「ヤポンスキー　クーシャユ（日本人食事だよ）」と主人は軽く朗らかそうに云ってくれた。

「スパーシボ（ありがとう）」「ああ私達はありますから…」と遠慮気味を押しのける様にして主人は手を洗っている私達に真新しいタオルを両手で差し出してくれた。折角の好意を無にしては…と厚く礼をし借り受け思わずK君と顔を見合わせた。

部屋のどこにも手拭らしき物が見当たらない中に日本人の為に、しまい込みの新品を出してくれた、その気使いに、私は心中涙を禁ずる事が出来なかった。

ソ連の一般人に会ってみれば心良い、懐かしい味のある民族である事は誰しも、今迄、知りえたものであった。何故、こんなに心の通い会える民族と敵対視しなければならなかったのか何か矛盾さえ感じる。

調理室らしき所の一隅のテーブルに幾皿かが並べられている。

ゲルマンスキーが我々の来るのを待っていてくれた。夫人の心からなる手料理が美味しそうに、皿に盛られていた。馬鈴薯と米、バターがケチャップの様な野菜スープに煮え溶けていた。

それは現在おかれている環境の中で、しかも嘗て口にした事のない異様なまでの味覚に不可解さえ感じた。

珍しい、そして今迄噂に聞いていた日本人とはどんな国民であろうか、と丹念に観察する婦人の目に、〔自分は日本人だ。そして日本人らしい姿に帰ろう〕と細心の注意を拂っていた。

つい先程も二人でテーブルに就く時は極めて感謝しながら、そして遠慮深げに椅子に腰掛けた。

熱いスープを一匙々々運んでいた私とK君は期せずしてハッとする音に気付いた位に、本当にうまい食べ物にありついた、という感覚であった。

二人はソッと顔を上げた。それは他人眼にゲルマンのマナーと余りにも対象的であると思った。それ位に私達日本人は敗戦を境に人間性、日本人らしさから遠ざかりつつあるとも思った。

そして又、ドイツ人達は俘虜生活に体験も多く、そんな生活を自分のものにして了っている感覚を諦めきった中の安定感があるからだとも思った。

黒パンが食い切れない程皿に盛られている。空腹を訴えていた私達の腹に食い入る様に入っていった。私達は「オーチン　ハラショー（大変結構ですね）」「スパシーボ（有難う）」と云う外言葉は無かった。

K君と二人しか通じない不便？日本語である丈に、良きに付け悪しきにつけ心にある丈何を話しても遠慮のいらない安心感に包まれていた。

ドイツ人等も楽しそうに話しかけてくれた。ロシア語と英語の混ぜこぜが辛うじて通じ合う程度である。

しかし彼が自慢する程、文法にかなった英語でない事だけは確かだった。英語より身近かにある外国語として身についている様な感じである。

美味しそうに食べる四人の外人を婦人は満足げに見入っている。

皿の空くのを待って、次の御馳走を盛ってくれた。「ああ皿がないから待っていてくれたんだなー。スプーンだって木製、金属製と揃っていないなー、物がないんだなー」とK君とこんな事まで何も不安な思いもなく話し合い笑う事も出来た。

馬鈴薯と米と粉らしき物を油で炒めてあるようだ。それに牛乳がなみなみと…。黒パンとそれ等を平げた私は、全く満腹やっと人間味を取り戻した思いで革バンドを緩めていた。その外の魚と馬鈴薯の皿には手がでなかった。

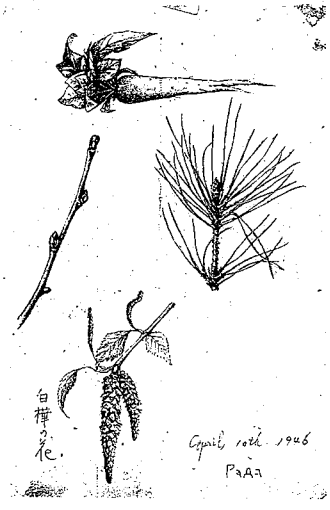
そして私は色んな事を忘れてすっかり此の家のお客に成り切って了っていた。

ふと我に返った。己は唯の北欧の旅行者なのか、否々、ラーゲル（収容所）の誰かがこんなもてなしを受けた事があるだろうか。之が俘虜へのもてなしなんだろうか。

何の偏見もなく、こだわりも見せず、色んな事が心の中で交錯しはじめた。

只々感謝の気持ちの外何物も無かった。

若しも立場が変わっていたとしたら日本のどこでこんな光景が考えられるだろ



筆者がソ連から持ち帰ったスケッチ

うか疑念を抱かざるを得なかった。

煙草をふかす我々の満腹な顔を見ながら婦人はうれしそうに喜び笑っていた、母の様に。

ややあって再び作業が始まった。

ペチーカはずんずん積み上げられていった。三つの民族合作の此のペチーカは此の家に永く永く思い出のエピソードを残して語り伝えられてる事であろう。

狭い家に太いペチーカが二つ座っている。

ラーダ収容所付近のカラマツ林

一九四六・五・二　画

その一つは、パンを焼いたり、炊事も出来る様になっている。生き生きした緑のトマトがその上に行儀よく並んでいる。

白いレースカーテンが窓辺を飾っている。

「イジィ　シュダ　スマトリーチェ（ここへ来て御覧なさい）」

婦人は得意そうに指さした。

先程からカッチンカッチン振子の音を耳にしていたので時計だな…と直感した。

「二時三〇分ですね」と私は合いずちを打ったものの時計の少ないこの国丈に更に

「ハラショー　チャースィ（いい時計ですね）」

と言葉を継ぎ足して誉めた。

いつか移動の行軍途中で「この村には時計がありますよ」と村人から聞いた事も思い出したからであった。

時計とはいえ全く旧式な貧しささえ感じる古い置時計であった。国の総てを戦争に、軍備五カ年計画に次ぐ計画に時計は置き去りにされた事である。

そうゆう事が凡ゆる国民生活物資の極端にまで不足している姿に見られるのも、社会主義の此の国の政策であり又、疲弊し切った偽らざるソ連の姿でもあろう。

ゲルマンに手伝って主人も一生懸命に指図している。とてもソ連軍関係の人とも思えない位、親しみのある親父タイプである。「人が沢山行き来するとペチーカがフラ付くかも知れないなー」とドイツ人が手振りを借りて話かけた。「たった二人きりだ。踊る時位のものだから大した事はないよ」とジェスチャーで答えていた。

ダモイ（帰国）が頭から離れない我々抑留者にとって地図を見るのが大好きだった。

壁に大きく張られている地図に見入って、

「私は元、ここに居たのですよ」

とタンボフ（TAM BOB）を指差した。

解説

この記録は、最近、記憶を辿って書かれたものではない。

藤野さんが、シベリア抑留中こっそり記し続けた紙片を、昭和二十二年十一月、復員の折に秘かに持ち帰り、間もなく、改めて便箋に書き移されたものである。

その稿を、藤野さんは、青春のメモリアルとして、四十数年間、これまた秘かに箧底（きょうてい）にしまい込んでいたものだ。

藤野さんとのお付き合いは、東満国境虎林に駐屯の迫撃第十三大隊に、共に所属していたことから始まった。お付き合いといっても当時、縁があって編者は、大隊本部経理室勤務となって、昭和十七、八年の約二ヵ年藤野さんの部下として働いた。

だが、藤野さんは上官ぶるような振舞いは一切しなかった。大隊随一の眉目秀麗さは、そのまま挙措動作にもあらわれ、上品で、そのうえ謙虚で、温厚な人柄は部隊長以下将兵たちの篤い信頼を得ていた。

怒りを他人に移すようなことはしたこともない。

美しい気分を持たれていて、たしか冬の朝であったと思う。あたりが急に暗くなり、その突然の変異に雉が鳴き始め、野犬がほえ、太陽の周辺にコロナの炎たつ、素晴らしい状況に出会った。皆既日蝕だったのである。民間では事前に分かっていたのであろうが、軍隊では、そのような情報にはうとかった。

藤野さんは、その印象の消えないうちにと、内地から転属してくる時に持ち込んだクレヨンでスケッチブックに、その状景を再現していたことを、編者は記憶している。

このような心情の豊かさは、捕虜生活の生命の局限状況に置かれていても変らなかった。

ここに掲げた二つのスケッチが、それを雄弁に物語っている。それに、この貴重な記録は、冷静でしかも暖か味のある内容だ。「文は人なり」そのままの反映である。

そして驚くべきは、文も絵も秘かに持ち帰ってきたことだ。大膽不敵な仕業である。

ソ連側は、記録の一切の持ち出しを厳禁した。もし持ち出すと、元のラーゲルに戻すといった厳戒ぶりであった。その警告を無視するとは、藤野さんの風貌から全く察し得ない事でもある。

いつかダモイの日が来るのを待ちつつ、丹念に描いたスケッチを、思いをこめて書いた記録をそのまま棄てるのは惜しい、という気持が先立っていたにしても度胸が据っていないと出来ない事である。

（岡部忠夫）

明治の風流人

横山清男の旅日記

『熱海の藻屑』（四）

佐久間　俊治

四月二十六日（続）

海原にうかび出でしは魚ならで（ではなくて）海士のすむてふ（という）あじろうら里

またはるかに下田港のあたり、沖にはなれて烟り立つ大島や初島見えたり。

大島もほそき烟りはたちにけり世をうみ見たる（世の中がいやになった）人のなみじや（航路だろうか）

錦ケ浦は目下に見おろし、磯うつなみしろじろと網引きするあまの小舟そこはかとうかべて、蒸気船烟りをなびかして行きかうそのけしきいわんかたなし（いい表わす方法もない）。この所三、四丁南へ下れば、狭き入江の如き磯あり。その左りの方、山の下に高さ二丈（約六メートル）ばかり巾一丈五尺ばかりの穴あり。その穴より北を望めば熱海の沖や、また、こなたの磯にうちよする浪の見ゆるもめでたし（すばらしい）。浪立ちし日はこの穴をうちぬけることもあらんかとおもうばかりに浪の洗いしあとや藻屑のながれとどまりたるも見えたり。この山の磯の先に松樹の生えたる岩あり。これなん烏帽子岩というなる。

霞たつにしきが浦に来て見れば浪をこうむる（被る）えぼし岩かな

海の上に浪うちかけるえぼし岩重きつかさ（官位の人）のしずむはてかは（だろうか）

またそのかたえに小さき岩あり、こは兜岩といえり

あだなみのうちよするともかぶと岩うごかぬ御代のためし（例）とぞ見る

ぬぎすてし人のえぼしや兜岩にしきが浦やだれもきてみん

魚見より十丁ばかり南へ行きて、曽我の浦不動の瀧ありと聞きしかと、今は道あれて行きがたしとて写真を見てやみぬるもお（惜）し。

そがの浦かたは見つれどしだ（羊歯）原のかかる瀧とは聞くのみにして

日の入るころやどりにかえりて夕かれい（夕食）すみて湯あみして衾に入りぬ。

同二十七日

空晴れ、岡本竹渓より送りこしたる去るとしこの地にて読みしたりという唐歌（漢詩）二首

大島流烟初島月　大島の流烟（噴煙）、初島の月

前湾人在画図中　前湾（目の前の湾）に人在り画図の中（絵のようだ）

繞欄山水都相識　繞欄の（旅館の窓の手すりをめぐる）山水は都て相識（もうなじみだ）

一笑呼杯倚晩風　一笑（にっこり）呼杯して（杯をもって来てもらい酒を飲みながら）晩風に倚る（夕風に吹かれている）

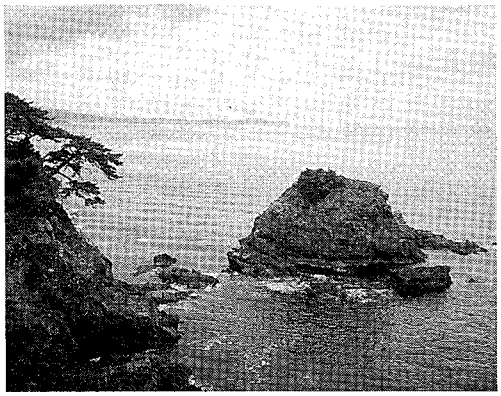
魚見暁来清不勝　魚見の暁来（明け方）清らかさ勝えず（この上なくすがすがしい）

陸離万頃浪生綾　陸離の（きらきらと連なって美しい）万頃（広い水面）浪は綾を生ず（綾織物のようだ）

人間第一快心所　人間第一快心（さっぱりする）の所（ここは本当に人がいい気持になる所だ）

日自水平線上昇　日は水平線より上昇す

とありければ、道はかわれどもこ



兜岩と烏帽子岩

じつけにその韻字をふみて応う。

その一

白帆近見晩霞中
二島微茫興海同
忽聴湯聲鳴屋外
天然神術若人工

その二

暁来春雨抹清勝
一望湾頭恰似綾
此地人間遊蕩處
絃歌吹笛半空昇

なくなく聞えてくる)

などものせしも我国の年ふり(ふるくからある和歌)だになまもの学びのえせ歌よみなるに、まいて他人の國(他国)のから歌を読みしたるは、われながらはじしらぬもほどこそあらめとひとりごちつつ竹渓、楠衛子、喜久子へ文送りて後、寿衛子ともども翠香園という牡丹園に行く。この園は熱海の入口の山のはに、幾咲の牡丹をうえならべたれど、いまだ時はやければわずかに五、六本ばかり、はやき花の咲きたりけり。されど見はらしのけしきいとめでたし

咲きそめし花に盛りをおもわれて
今しもめでのふかみ草(ボタンの異名)かな

また野中のいで湯(上宿町野中湯)を見て

いたずらに野中の水のわき出でてあつきこころを誰が汲むらん
誰が為に思い出湯のいかなればかかる野中にわきいでにけむ

また、湯の神社(上宿町湯前神社)は医師の祖「少彦名神」(別註9)と聞きて

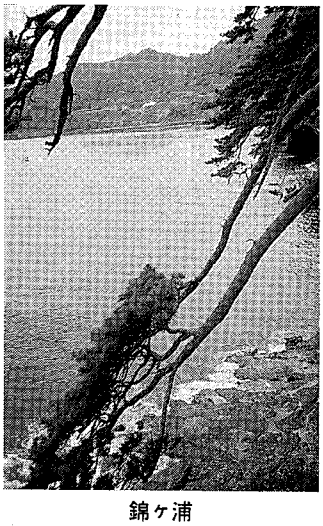
諸人のやまいをあらういで湯こそ
くすし(医者)の神のめぐみなりけれ

電気燈の元(当時の地図から「熱海電燈会社」のことではないかと思われる)に行きて見れば、その家の壁や窓の戸までも赤くぬりたるもことわりなりかし(りくつに合ったことだ)。

いなづまのともし火のてる家なれば
さすがに赤く見えわたるかな

打越谷茂木梅園にいたる。そもこの園は横浜の豪商茂木惣兵衛が梅三千株をうえて造りしもの(別註10)にて、この梅園をかく名づけたること、はじめおもいおこせし人のことなど園中にある、伊藤博文前内閣総理大臣たりし時内務官某(内務省衛生局長与専斉)等とはかりてものせられし石碑にくわしくしるされたり。

さてこの梅園の広きこと、谷川を中にして凡そ五丁(約五万平方メートル)ばかりもあらんとおもえる芝生に、所せき(せまき)まで梅樹をのみ植えならべて、諸所に休所を設け、また谷川には数ケ所に土橋をかけわたし、縦横に道を作りしなど世にたぐいなき梅園なり。されば石碑にもしるしたる世の人の病をいやす温泉ありといえども、とかく健康を全うするは運動にしくものなしというにありてこの公園をひらかれたれば、さすがにけわしからず、たいらかならず、そぞろ歩きのよきほどにしつらいたり。今は実を結び若葉生い茂りたる中なれば、その下道はくらきまでに枝さしかわしたるを見ても、花咲くころはいかばかりかはと名残りの香りもえいたらん(酔ったような)ここちせられぬとまた例のへぼ歌読める。


錦ヶ浦

三千もとの梅の林にわけいれば
花のなごりをみ(実)にかおりぬる

また鶯の声を聞きて

梅は実をむすびてもなおかおるかな
園生(にわ)をしめし鶯の声

寿衛子もとりあえず

花の香のなごりをおしみ鶯は
梅の林をはなれざりけり

この歌、予が歌うようははるかにまさりて聞こゆ、いとめでたし。またこの園の中を流れたる谷川のかたえに、香渓とほりつけたる石碑のありければ

若葉せし梅の中行く谷川に
花の香の名はなおながれけり

別註9＝少彦名神　少名毘古那神
『記紀』『風土記』などに見える神、大国主命と協力して国造りを行い、温泉を開発、医療・禁厭の法を定め、酒を造った。

別註10＝茂木惣兵衛の梅園造成
茂木惣兵衛は、一八二七年高崎生れ。縁あって横浜貿易商高野沢庄三郎の支配人となり、後、のれんをゆずり受ける。一八六九年横浜為替会社頭取。原善三郎と、横浜生系の双璧と言われた。一八九四年病没六十九歳。
（山田兼次『熱海風土記』一六四頁から）
翕汚館が最新式の温泉医療機関として開業したあと、翌十九年四月に茂木惣兵衛の尽力で梅園造成の功がおえたことも、熱海文化史上の一事件であった。というのは、この梅園もまた熱海を近代的な保養地にしようとする当時の開化政策の一環として構成されたものだからである。提唱者は、あたかも初代内閣総理大臣となった伊藤博文である。彼の意見では、病気療養のためには、一室にとじこもって温泉にはいるばかりではだめだ、それではかえって心神が疲れてしまう、翕汚館ができて医療施設そのものは整ったのだから、つぎには精神衛生のための散歩コースをつくるべきだというのである。茂木はこの提唱に応じて温泉業者と協力して前年からこの梅園の造成に乗り出したわけである。（『熱海市史』下巻・二〇四頁）

資料「天災見聞」

関　重麿

『六十夢路』より

嘉永六癸丑（一八五三）早春大雪三昼夜積ルコト尺余寒暖順ナラス。

古老曰天明震災ノ後七十年許ナリ恐ラクハ地震ノ前兆ニアラスヤト。

二月二日（陽暦三・三）天晴風ナシ己ノ上刻（午前九時頃）余ハ集成舘ニテ大学ノ講義ス。忽チ西北ノ方に巨響ヲ発シ大地轟々トシテ震動シ瞬時ニシテ講堂・官廨（役所）・演武場・習字場トモ破潰顛倒ス。雲煙リヲ揚ケ灰塵ヲ飛ス。禽（小鳥）ハ落チ獣（犬・猫など）ハ伏ス。時ニ習字場ノ児童数十壓セラルヽノ所タリ。直ニ馳テ之ヲ救出シ、又出火ヲ防消ス。

城中ハ、天守櫓塀大破シ、本丸ノ多門櫓崩落シ、二ノ丸石垣数十間陥落ス。侍屋敷皆潰レ家四十余戸半潰レ家二百十余戸、足軽小屋百七十六戸潰又半潰他市在数千万戸ノ潰又半潰大破アリ。山崩レ堤ヲ毀チ道ヲ杜キ東海道路ノ絶ツ事数日、又震動大小数昼夜不止、人民露宿スルコト数日ナリ。

當地地震ノ大ナルモノ約スニ六、七十年ニアリト云フ。之ヲ三百年ニ遡ルニ寛永九年（一六三二）、元禄十六年（一七〇三）、天明二年（一七八二）ニアリテ、寛永ノ地震ハ稲葉氏カ三島社ノ神木ヲ伐採セシノ神罰ナリト云フ。口碑ノミニシテ詳ナラス。元禄ノ地震ハ尤モ劇甚ニシテ、天守ヨリ出火シ城下ヲ全焼シ壓焼死ハ無算（数えきれない程多い）ニシテ、谷津村（小田原市城山二丁目）ニ新墓地ヲトシ埋葬シ、後慈眼寺ヲ建ツト云フ。余カ家ハ當時林角ニアリ。皆潰トナリ死者女一人アリ。即チ隠居美僖君ノ奥自性院ト云フ佛ナリ。又東南ノ地ハ家ヲ潰サヽルモ全焼セリト云フ。

天明ノ地震ハ元禄ノ如ク甚シカラス。僅ノ破潰家アリテ死傷アルナシ。

嘉永ノ地震モ相豆駿地方村落ニハ死傷多々ナルモ小田原ニハ死傷ナシ。余カ家ハ元禄年中ノ仮屋ニシテ百六十年ヲ経過セシモ只大破ニ止リタリキ。

安政元（一八五四）丁卯（旧暦）十一月四日（陽暦一二・一二）関西諸国大地震アリテ沿海諸国ハ海嘯アリ。山ハ崩レ地ハ陥落シ、人畜資産ノ損害ハ実ニ夥多ニシテ計ルヘカラサルナリト。小田原モ再地震アリテ多少損害アリ。當時魯西亜ノ使節プーチャチン軍艦某号ニ乗リ伊豆国下田港ニ碇泊アリ。我藩兵數百人同港ヲ警備シ柿崎村ニ宿営セリ。同村ハ同港東岸ノ埠頭ニシテ戸約スルニ二百アリ。

此日辰ノ中刻（午前十二時頃）地震アリ。村民疾呼シテ海嘯々々ト、老若男女皆争テ岡丘ヲ臨ミ避走シ、或ハ家ノ棟ニ上リ又ハ二階ニ登ル者アリ。時ニ海水俄然トシテ逆退スルコト十数町、本港ハ過半干潟トナリ忽チ海底ノ砂泥ヲ顕ハシ、碇泊スル大小ノ船舶ハ皆砂泥ノ上ニ屹立シ、水夫船客数百千砂泥ニ飛ヒ下リ逃走スル、風中ノ乱草ノ如シ。

魯艦モ亦危険、殆ント傾覆ラントシテ僅カニ免ル。

須臾（まれ）ニシテ、巨涛暴漲シ港面ニ溢レ山嶽ノ如クニ滔々トシテ返襲シ来リ、浪先キ北方蓮台寺川ニ至リ倏忽（たちまち）トシテ退奔スルノ響ハ轟々トシテ疾雷ノ如ク、退潮ハ激渦シ其觸ルトコロ家屋倉廩（穀物を貯蔵する倉）悉ク其渦中ニ浸入シ、大小ノ船舶皆破摧シテ盡ク。其進退スル三次ニシテ海上旧ニ復シタリ。然レドモ男女啼哭叫喚ノ声ハ波上ニ残レリ。其状況ノ悽愴見者皆寒膚生粟セリト（當日実見セシ出張藩人ノ話ナリ）。下田町千余戸存スル僅ニ三戸。又南端ナル七軒町ハ災ヲ免ルル戸十六、七アリ。人畜ノ死亡資産ノ蕩盡ハ多々ニシテ詳ニ算スヘカラサルナリ。

時我藩ニテ柿崎村其寺ヲトシ、飯米ヲ焚出シ施行シ罹災ノ人民ヲ救助

スル数日ナリト。柿崎ハ多ク山ニ寄リ家ヲ造ルト虽モ家屋浸潮ニ丈余、幸ニ流失ナク又人畜死傷ナシ。魯艦ハ船底ヲ破リ後戸田港ニ廻航ノ途上颶風（つむじかぜ）ヲ以テ駿州冨士川沖ニテ沈没ス。乗組五百余人ハ五貫嶋村ニ上リ僅ニ免ル。古老曰當港ノ海嘯ハ約スルニ七十年位ニアリ元禄年中ヨリ第三回ノ海嘯ナリト云々。

同三丙辰八月廿五日早旦（よあけ）雲行良ナラス。倏焉トシテ（たちまち）巽（東南）ノ方ヨリ黒雲ヲ出シ又正東ニ変シ疾行飛走ノ如シ。或ハ断間ニ日光ヲ見又微雨ヲ濺ク。夕方ニ至リ巽ノ強風ヲ加ヘ、雨量増加シ、夜三更（午後十一時から午前一時頃まで）一陣ノ疾風颯颯然トシテ暴起シ忽チ天地震動シ砂礫ハ飛揚シ枝葉ハ舞蕩シ家屋顛倒シ樹木臥折シ只暗黒ノ中ニ颯々声ヲ聞クノミ。暁ニ至リ雨止ミ風力殺ク。

起出テ四方ヲ望ムニ、長杉巨松ハ多ク臥レ、家屋数百千戸吹キ倒サレ又ハ破損シ、全キモノアルナシ。東海道路ノ並木ハ古松ノ仆折スル数百本ニシテ往来ヲ遮止スル数日ナリ。江戸又風災アリ。沿海ハ海嘯アリテ家屋ノ流失又潮浸スル数万戸ニシテ其損害実ニ夥多ナリ。築地ノ西本願寺倒潰シ壓死スル者数百人皆成佛セリト。古老皆曰ク三百年来ノ大風ナリト。

伊豆国大島ニ火山アリ。漁人其煙ヲ以テ晴雨ヲトスル久シ。一夜倏乎煙ヲ絶ツ。老漁者曰、今ヤ煙ヲ絶ツ恐ラクハ火脉中ニ破裂スルアランカト。明治七年（一八七四）七月初旬其煙ノ昇ル旧ノ如クニ復シタリ。八月伊豆国ノ三宅嶋噴火ノ報アリ。曰ク本嶋神著村内宇東卿ハ戸四十余アリ。口二百余民ハ農ト漁ヲ以テ生計ス。七月三日午後雄山ニ異響アリ、民之ヲ怪怖ス。須臾ニシテ井水ハ悉ク涸レ盡キ而シテ悪臭ヲ発スアリ。皆噴火ノ前兆ヲ知リ資財ヲ携ヘ老少ヲ扶ケ避テ本村ニ走ル。倏忽トシテ暗霧ヲ降ラシ電光ヲ迸シ火炎熱湯ヲ噴キ家屋園圃樹木草卉悉皆燼灰烏有（火災で財を失うこと）タリ。数日ニシテ自ラ消滅シ徒ニ奇異状体ノ岩石ト温泉ノ数ケ所ニ湧出アリト云フ。左ニ石原重庸氏ノ実地ヲ見聞セシトコロヲ記ス。

島吏云、本年七月初三正午十二時頃ニ山鳴震動ヲ起シ、即時雄山ノ「島中第一ノ高山」北面半腹ノ辺ヨリ起リ、東卿居村及耕地山林海中ニ至ル迄地火炎ヲ吐キ、砂石空中ニ飛揚シ焔々天ヲ焦シテ日光ナク、爾々地震フテ島飛ント欲ス。東卿ノ民老ヲ扶ケ幼ヲ負ヒ轉輾本村ニ遁レ来ル。流囚傳右エ門一人ノ外幸ニシテ恙ナシ。蓋シ其災山上ヨリ順次山脚ニ及ニ因ト云フ。後十五日ヲ亘リ漸々ニシテ稍収ル。戦栗之ヲ其所ニ見ル。一円廣漠ノ磧礫トナル現ニ此ノ如シト云。今目撃スルトコロ曽テ聞処ニ異ナリ眞ニ驚クヘク恐ルヘキノ地妖ナリ。其磧礫界トナル縦横凡三、四十町一撮ノ土砂ナク、岩石地上ニ峙ツ者一丈乃至二丈、其塊ノ形タル怒涛ノ岸ヲ噛ム如キモノアリ。或ハ劔戟ノ樹ルカ如キモノアリ。種々ニシテ形容ス可ラス。其塊ノ性タル石質ニシテ堅緻ナラス。溶鐵滓ノ如クニシテ石炭ノ気硫黄ノ気アリ。其臭鼻ヲ突キ各所煙ヲ吐ク。按ルニ岩硫ノ気土中ニ伏シ、終ニ沸騰シ炎気散ルニ従ヒ凝結塊ヲ為スモノト見ユ。其海面ハ岸ヨリ縦四、五町横十四、五町許リ陸地ト齋シク一円ノ磧礫トナル。是海底ヨリ沸騰セシモノト見ユ。其陸地磧礫中方丈若クハ一畝計リ點々草木依然タルアリ。是奇中ノ奇ナリ。其飛揚スルトコロノ碎屑東ニ降リ耕地林叢ヲ埋ム亦数十町隣村坪田ノ内ニ及フ。深浅差アリ其埋ムル処ハ数年ノ後開墾ノ功モ成スヘケレ尼其磧礫ハ永ク無用ノ地タルヘシ。嗚呼東卿ノ民何ノ罪カアル惨然襟寒シ。

明治十年（一八七七）八月十日旦ニ雨ヲ催シ東北ノ風アリテ浪ノ音常ニ異ナリ。午後高浪頻リニ襲ヒ来リ、堤塘ヲ被リ家屋ヲ破潰スル多ク、夕刻ニハ浪、大蓮寺（小田原市南町二丁目）前ノ水車ヲ壓潰シ、其餘波ハ余ノ門前迄押上リタリ。水主車屋ノ如キハ家ノ下ヲ洗ヒ去レリト云フ。當沿岸流失スル家二十八戸破損ノ家二百余戸アリ。堤塘ノ流亡スル数百間田畑ノ荒蕪トナリタル数丁ナリ。眞鶴モ海嘯アリ。和船碇泊スル十二隻ニシテ僅カニ免ルル一隻ノミナリ。

古老云フ、天正ノ初メニ此ノ如ク大浪アリトノ口碑ヲ存セリト。十字町四丁目字新久ニ角屋某ナルモノアリ。家ハ同地ノ東南ニシテ海打際ヲ離ル八、九十間。此日家族皆恐怖シテ他に出テ避ケンコトヲ云フ。主翁幸助肯カス。及チ云、予年七十余己ニ天保七年（一八三六）ノ大浪ヲ経験スルニ家ノ前ヲ侵サス。徒ニ恐怖シテ避走スル益ナキノミト。其辞未タ終ラス巨涛山ノ如ク襲来シ家ト土蔵トヲ一掃シテ流失シ、家族ハ僅カニ免ルルヲ得タリト云フ。

又吉濱村農常磐半蔵ナル者アリ家ハ海岸ニ面ス。嘗テ逗留スルトコロノ盲人某アリ。此日ノ早旦卒然トシテ（だしぬけに）云フ。今朝ハ浪音常ニ異ナリ恐ラクハ海嘯ノ変アランカ、盲人ノアルアラハ家人ノ煩ヒ多々ナリ。乞フ山村ニ避ケ行ント。主人冷笑シテ之ヲ止ムレドモ肯セス遂ニ人ヲシテ城堀村ニ送ラシム。然ルニ午後ヨリ波浪漸ク強ク、夕刻巨涛頻リニ襲来シテ、其家ニ浸入シ、遂繫舟ノ碇綱ヲ絶チ、其家庭ニ衝突スルアリテ大ニ損害ヲ蒙リタリ。

後日其盲人ヲ迎ヘ之ヲ謝シ其機ヲ知ルヲ問フ。答云、昔日下田港海嘯ノ日柿崎村ニアリ。此朝先師亀ノ市ノ云フ、本日ハ海嘯アルヘシ。浪ノ音高クシテ近クニ響ナク徒ニ其底ノ響ヲ感セリ。天明年間ノ海嘯ノ時モ亦此兆アリト。果シテ海嘯アリ。先日ハ偶々先師ノ言ヲ思ヒ出セシノミト。具眼翁ハ既往ヲ忘信シテ家蔵ヲ流亡シ盲目者ハ往事ヲ追懐シテ其身ヲ全ス。

呵々

句読点、行替え、ルビは編者による。

古墳遍歴（十二）

知られざる皇陵（六）

飯田悟郎

顕宗天皇陵

第二十三代顕宗天皇は前号にて述べましたように、第十七代履中天皇の皇子で悲命に死なれた市辺押磐命の遺児お二人のうちの弟君であり、幼名は弘計（ヲケ）、飯豊天皇の後を受けて即位され、近飛鳥八釣宮（チカツアスカヤツリノミヤ）に宮居して天下のことを統べられた、とのことです。

この辺の事情は記・紀では多少異なっていますが、何れにしても、身分を明らかにされ、都に迎えられた後、ご兄弟が互いに即位の順を譲り合い、また、父王の仇を報じようとしたくだりなど、なかなかに面白く、一時は馬飼・牛飼にまで身を落され、辛酸を嘗められた故にか、情けに厚く、仁政をしかれ、天下は安く平らかにして、民に用役なく、五穀はみのり、百姓は富めり、とたたえられています。

ですが、それにしてはこの方の御陵はどうしたのでしょうか。

御陵は傍丘磐坏丘南陵（カタオカノイワツキノオカノミナミノミササギ）と呼ばれ、奈良県香芝町北今市にあり、王子から南に大和高田に向かう国道一六八号線に沿って、和歌山線下田駅の少し上手、北に向かって左手の旧道に沿うちょっとした高台にある、小型ながら形の良い前方後円墳で見事に整備されていて、皇陵らしい雰囲気をたたえてはいるのですが、あの雄大な雄略天皇陵はともかくとして、前代の清寧天皇陵や、次の代の仁賢天皇陵や、飯豊天皇陵と較べてさえ、周囲を巡る濠もなく、形も大きくなく、環境も少しですが貧弱であり、また時代的にも相違する点が見られ、どなたかの陵墓ではありましょうが、どうも顕宗天皇陵とは思えないのです。

この御陵から南東に三キロほどのところに近鉄大阪線築山駅があります。この駅のすぐ南に築山古墳という宮内庁の陵墓参考地にもなっている立派な周濠を巡らすかなり大型の前方後円墳があります。但し、この古墳は、武列天皇陵ではないか、という説が有力ですから、他にもう一つ探すと、築山古墳から西北西に二キロほど、五位堂駅の西方の狐井に、陵墓参考地でこそありませんが、これも立派な周濠を廻らす前方後円墳があり、狐井城山古墳と呼ばれています。

このふたつの古墳のうちのどちらかであれば、史書に見られる顕宗天皇の御治績に相応しい御陵といえるのではないか、と思うのですが、これはあくまで私見に過ぎないことをお断りしておきます。

何れにしても、明治初期に行われた皇室関係の陵墓の比定は、現在では疑問視される処が少なくなく、宮内庁がかたくなに拒んでいる学問的な検証がもし許されれば、このような面での実証が幾つも得られるのではないかと思われます。

崇峻天皇陵

第三十二代崇峻天皇は欽明天皇の第十二子で、諱は泊瀬部（ハッセベ、又は長谷部若雀、ハッセベノワカサザキ）、母は蘇我稲目の娘の小姉の君で、敏達・用明・推古各天皇の異母弟であり、用明天皇の皇后で聖徳太子の母である穴穂部間人皇女（アナホベノハシヒトノヒメミコ）の同母弟であられます。

用明天皇が五八七年四月に崩ぜられたあと、前代以来の蘇我馬子と物部守屋との対立は遂に武力衝突にまで発展し、同年七月に激戦の後さしも強大を誇った物部大連家が滅んだ後、八月に炊屋媛（カシギヤヒメ、後の推古天皇）らの援助により即位されたのですが、それからも蘇我氏の権勢は増すばかりで、それを嫌った天皇は蘇我氏の勢力を殺ごうとして逆に蘇我氏にねらわれ、遂に五九二年十一月に馬子により暗殺されたのでした。

暗殺を噂される天皇は他にもないことはないのですが、正史に暗殺と明記されているのはこの方だけです。

それかあらぬか、普通ならばかなりの期間にわたるはずの殯（モガリ）もなく、即日倉梯岡陵（クラハシノオカノミササギ）に葬られたばかりでなく、陵地・陵戸（リョウチ・リョウコ、御陵を維持・管理するために寄贈された領地と衛士）もなく、このような例は他にないとのことです。

奈良県桜井市倉橋に所在するこの御陵は、そのためか哀れにも侘しく、多武峰小学校のそばにあり、バスは倉橋で下車します。

しかし、実際に詣でてみますと、天皇陵としては余りに貧弱に過ぎ、明治初年の比定に何か誤りがあったのではないかと思われます。

この御陵から東に忍阪に抜ける道の左手の丘上に赤阪天王山古墳と呼ばれるかなり大きな方墳があり、盗掘孔とおもわれる狭い入口からむりやりもぐり込んでみますと、見事に石を畳みあげた石室の中央に立派な石棺がおかれ、充分に皇陵級の貫禄を見せていて、これが本当の崇峻天皇陵ではないか、と云われています。

（続）

やがて消え去る戦中戦前派世代が戦後生まれの人々におくる言葉（その三）

高田 喜久三

この文章の第一回を書いたのは、この年つまり平成五年の春でした。既成政党の一党独裁が永く続き、我国の政界は黄金臭ふんぷんたる汚職まみれとなり、国民の不満反発は巷に満ちていました。さりとてこれらの改革は口先だけで一向に進まず、一方世界の冷戦構造が消滅して大きな潮流変化が進んでいるにも拘らず、これに対応することもなく、国民は等しく逼息状態の中で暗胆としていました。そんな中で私は、戦中戦前派世代と戦後世代の思考、感覚の大きな落差を痛感して、もどかしさに耐えずこの文章を書きはじめたのでした。そして前回においてはその落差をもたらした原因の一つに、戦前の皇国皇民思想と戦後の民主主義社会とを対比させて論じました。そしてさらにその他の要因をも探りたかったのです。

ところが去る平成五年八月、突如として古いいわゆる五十五年体制（一九五五年、社会党諸派が合同したのをみて自民党も保守諸派を合同して強力な政権を建てたこと）が倒れ、新しい革新政権が誕生して局面は一変しました。そしてそれまで日本国の将来が大へん悲観的であったのに、一転明るい光が射してきました。これから戦後世代の人々が作るであろう新しい世界への希望が湧いてきました。私はこんどの革新政権の出現は、その正否は別としても、大仰に言えば明治維新の変革に比すべき重大な歴史的転機であると思っております。

我国が明治維新以来ずっと歩んできた近代国民国家創建のおよそ百二十年の道程を振り返ってみますと、二十世紀世界の先進国はいわゆる帝国主義政策、植民地獲得に狂奔して数々の戦争を惹き起こしてきました。私達の日本国も彼らの轍（わだち）のあとを追って、日清、日露の戦後、大正に入って第一次世界大戦に参加、さらに昭和の日中戦争から太平洋戦争へと突入、結局は大敗して祖国を焦土と化してしまいました。しかしそれは敗戦日本国だけでなく、戦勝国であるアメリカはじめ欧州のいわゆる西側陣営も、大戦の結果アジア、アフリカの植民地が独立して、今までと全く異った次元の世界に入ったのでした。

殊にここ数年来のロシヤをはじめとする社会主義体制国家の崩壊は、永かった世界のイデオロギーの対立、冷戦構造をついに終結させました。それでは西側の自由主義世界は安泰になったかというと、とんでもないことでご承知のように、民族問題、宗教問題が新しい悩みの種となって解決のメドが立っていません。今や世界はあらゆる面で難問が山積しているのです。

そこで私は戦中戦前派世代と戦後世代の対比を検討するよりも、戦後世代の人々に今後の未来社会、新しい世界への展望を語り、私達が通り過ぎ体験してきた戦前戦中の歴史を語って、反面教師とするのが賢明であると考えるに至りました。

私達は今まで歴史探求の道を余りにも日本国の足もとばかりに限定してきました。しかし現代は世界の中の日本として考えねばならない時代に入ってきました。政治経済は言うに及ばず、すべての文化をグローバルな視野のもとに考察せねばならなくなりました。そう言う意味で今までに学んだ日本史を、世界の中の日本という視点からもう一度見直す必要があると考えております。月並みな格言ですが「温故知新、古きを尋ねて新しきを知る」の言葉がつくづくと思い返されるのです。

もちろんこのたびの革新構造がそのまま順調に展開してゆくとは寸分も思っていません。むしろ目下は海図のない航海をするように、いつ、どこで、どんな事件が起るか予想も出来ないのが実状でしょう。これからは世界中に数多くのトラブルが起り、あるいは絶望的な危機に遭遇することもあるかも知れません。しかし百年二百年の年月をかけても人類の叡智はいつか必ず正常な航路を見つけるであろうと私は信じております。

いま街を歩くと各所に「人類は兄弟、世界は一つ」と書かれた標語を見かける

現代川柳

高井 喜雄

現れて消えて四島霧の中
むずかしい党人閣僚やじろべい
亡妻を忘妻と書くボケ始め
天の声どんな声かと子に聞かれ
渋滞に二泊三日の大あくび

でしょう。これは地球人類の最後の理想です。だがその実現はそう簡単にはいかないと思います。さきに述べたように数百年もかかるかも知れません。しかしよく考えてみますと私達はすでにその理想への道に一歩を踏み出しているのではないでしょうか。

私達はいま、ボーダレスの世界を築きつつあります。すなわち今までの国民国家と言う境（ボーダー）を乗り越えて、境界のない社会を次第に創りつつあります。ECすなわち欧州連合の実現もその一端です。日本でも海外へ企業が進出していろいろと経済活動をしています。多国籍企業と呼ぶ形態です。もっと身近なことで見れば、今日の日本人で海外へ行ったことのない人は少なくなりました。従って日本人の海外認識は非常に広く高くなっています。又、海外へ行かなくても私達はテレビというメディアによって居ながらにしてアフリカの奥地、アマゾンの秘境を探ることが出来ます。正に私達は知らず知らずのうちに世界は一つの認識を深めている訳です。

日本歴史を学ぶと、古代において中国や韓国の人々が多数渡来して、新しい文化をもたらし飛鳥、奈良の華麗な文化を創出したことがよく判ります。その上彼らは先住の日本人と結婚して今日の私達日本人を形成したのです。これからボーダーレスの社会となって民族の血の交流も行われることもあるでしょう。世界は一つ、人類は兄弟という人類の悲願はあながち夢幻ではないと思います。

さて私は歴史資料の発掘と研究を主目的とするこの史談会々報へ、少しばかり毛色の変った評論を載せたようですが、歴史は生きていることを自覚し、あえて現代ウォッチングの一端を語って、戦後生れの人々の今後の歩みに少しでも参考になればと思い、あと僅か数年で二十一世紀が訪れる感慨をこめて筆を擱くことに致します。

（終）

一夜城連れ小便を緒口に

石垣山の一夜城で眼下の小田原城を眺めながら連れ小便をしつつ秀吉と家康のやりとり。

「のう家康殿。小田原が落ちたらこの広い関東を貴公に差し上げよう」

「ハイ殿下。よしなに……」

（この狸親爺め、何を言いやがる、そのうち見ていやがれ）と家康の腹の中。

尊徳は算盤はじいて夜があける

二宮尊徳は小田原出身者としては、珍しく合理主義に徹した人物である。仕法（農村復興策）を頼まれると、現地の三十年間にわたる生産消費の資料を調べ上げ、その数字にもとづいて計画をたてたと言う。計数に明るい人であったのだ。

ふるさとは心にのみと尊徳泣き

ふるさとは誰しも懐しい。しかし尊徳はついに故郷小田原には還らなかった。彼のふるさとは心中にのみ。室生犀星に次の詩がある。

ふるさとは遠くにありて思うもの
かへるところにあるまじや

尊徳と巴御前が同居とは

二宮尊徳の菩提寺栢山の善栄寺には、尊徳の墓と言はれる慰霊碑が在り毎年地元の人の手で墓前祭が行はれるが、同じこの寺の境内には巴御前の墓もある。巴御前は木曽義仲戦死ののち、鎌倉の和田義盛と再婚した。義盛の領地が栢山村にあったので、彼女の墓が此処に在るのであろう。

百年前の主な出来事

〈明治二十七年〉

一月七日　小田原町十字一丁目（小田原市本町一丁目十三番）に足柄下郡警察署落成

一月二十七日　底倉学校と大平(台)学校（箱根町）が合併、尋常温泉小学校と改称

二月七日～十三日　川上音次郎一座　寺町・桐座（小田原市扇町一丁目十三番）に於て、続いて茶畑鶴座（小田原市本町四丁目）にて十四日より三日間興業

四月十五日　報徳二宮神社、遷宮式

四月二十七日　小田原に天然痘発生、町は、新玉町（小田原市浜町一丁目八番）誓願寺を借り入れ避病室に当てる

五月十六日　北村透谷、東京芝公園地第二十号四番の自宅の庭で自ら命を絶つ。二十五歳。芝・瑞照寺に葬る。

五月　足柄上郡福沢村（開成町）で川崎製糸場創業

五月　尋常高等多古小学校、課

＝一枚の写真から＝

此の子等に孫が…

西山銈太郎

前年東京近歩三に應召した私は戦地行の部隊へ転属に際し、三泊四日の外泊を許可された。昨年六月戦地行を覚悟で家を出たが一年四ヶ月余りもたつと何やら用事が出来た。数日は瞬く間にすぎ、帰隊日の夕方思い出して妻子と共に普段着のまま、写真館へ飛び込んだのが此の写真である。又現役時共三年間着なれた内地の軍服の最後ともなった。爾来戦後帰還する迄の五年四ヶ月肌身はなさず持ち歩き、無事の四肢五体と共に持ち帰った記念の品でもある。

應召時生れて六十日だった次男は小学校に入る年齢になり、その後の三男と共に私は八十三才孫九人で、結婚六十年を迎えた夫婦は二人の曾孫と共に元気である。

部隊は佛印からジャワ島に渡り西部ジャワの警備に服した。戦況の変化に伴なって遂次有力な部隊は他戦場へ転用された。ジャワ派遣軍は、二つの獨立守備隊にのち獨立混成旅団に改編されたが、日本本州よりも稍小さい位の島ではとても兵力は足りない。軍は原住民のみに依る郷土防衛義勇軍を編成した。最初南岸後北海岸の築城に専念したがやがて終戦。

インドネシヤ人は直ちに獨立宣言をなし行動を開始した。接収に来た英軍はイ軍と戦闘、東部では英将官が戦死し、全島に於て日本人にも多数の犠牲者が出た。バンドンに於ては日本軍に警備・輸送・連合國人救出を命じた。二十一年六月敵前上陸を伴う任務を命じ、その二十一日始めて武装を解いた。武器を捨てたら急に命が惜しくなった。老齢病弱者は先に帰れとジャカルタへ送出されたが、其の夜から作業が待ってた。爾来七ヵ月埠頭で荷揚作業に従事し、昭和二十二年二月二十四日、應召以来六年九ヵ月振りに戒衣を脱ぐ事を得た。

今此の写真の長女・長男を見て戦中戦後を思い出し、「よくまあ此の子等に孫が…」と思うと、毎日朝夕で四～六km以上の運動を必要とする程度の健康さではあるが、平和の時代に生きる幸を今しみじみとかみしめて居る。

業時刻の合図の拍子木を廃し鐘を使用

六月十一日　国府津村一、三〇七番地農家より出火　二十七戸焼失

七月二十三日　箱根湖水事件のため小田原町　水利委員選挙

七月　箱根温泉組合「箱根温泉案内」を出版

八月一日　清国に宣戦布告（日清戦争）

八月十三日　大本営を広島に進められるにより小田原町長、各名譽職、小学校生徒総代、赤十字社員国府津停車場に奉送（以上『明治小田原町誌』による。岩波書店『近代日本総合年表』には九月八日「大本営を九・一三より広島に進める旨発表。九・一五天皇、広島着」とあり）

八月　関重麿、神原富文ら「奉公会」を結成、事務所を小田原町十字三丁目六六九番地（小田原市本町四丁目四番）に置く

九月　小田原町の有志、出征軍人の貧困家庭のため目標額八百円の義援金を募集し扶助

十月二十三日　小田原米穀取引所設立認可、発起人今井広之助他十九名（翌年七月開業）

十一月十四日　小田原町水道使用料の新設の許可を、内務、大蔵両大臣より受ける

十二月二十八日　小田原町新玉一丁目騎兵一等卒小野田勝太郎清国盛京省滝口付近で戦死、葬儀執行

十二月　八月以来、足柄上・下郡の予備後備役で召集を受けた者二百十七名に達す

この年

。箱根に傷病兵転地療養所開設

。上強羅に早雲山より引湯の温温宿早雲館開業（強羅温泉開発）

。箱根湖漁業組合（この年三十年間芦の湖の漁業権が与えられ設立）マスの採卵孵化

。二月十日「消防組規則」公布により、小田原町では、公設消防組を組織全町を五部に分け手押ポンプを置く（従来の市町村条令による義勇消防組を廃し、知事管掌による全国統一の組織・運営となる）

。天理教小田原分教会、会所を山角町（小田原市南町一丁目）に置く

。茶畑・（小田原市本町四丁目）金融業同愛舎（本部広島）閉鎖

（岡部忠夫編）

古文書講座6

田畑売買の証文

内田　清

永代売買の禁止

寛永二十年（一六四三）田畑永代売買禁止令が出ました。豊かな百姓が田畑を買ってますます豊かになり、貧乏な百姓は田畑を売ってますます貧乏になることによって、封建制度の基礎である本百姓が地主と小作人に分解することを防ぐのがその目的でした。明治五年（一八七二）に廃止になるまで、寛文十三年の分地制限令と共に幕政の基本でした。

しかし享保八年（一七二三）の質流れ地禁止令の撤回によって法的には抜け穴が公認されました。とはいえ各地では、それぞれ慣行が生きていました。

有合い売りの証文

江戸時代の田畑売買は、売渡し、年季（期）売り、有合い売り、質入れなどの形態がありました。今回は多用された有合い売りの証文を検討してみましょう。

有合い売りとは、金銭の都合がつき次第請け戻し出来るという売り方です。証文に「金子出来候ハヾ右元金にて何時成共御返し成さるべく候」と書かれた物もありますが、当文書では①表題がこれを示しています。②所在地と面積、③代金、④売却理由、⑤代金受取、⑥年貢等の負担方法、⑦以後迷惑を掛けないという保障、⑧日付等の条項を記し⑨売主（A）と証人の村役人が署名捺印し買受け人（金主B）に差し出します。

土地の売買で後日争いになり易いので、証文は二通作成し双方で保管すると共に、村の帳簿に記載します。

請け戻しと増し金

有合い売り田畑の請け戻しは、売った時の代金をBがAから受け取れば成立します。利息分はBがAから受け取った田畑を自分で耕作する（手作）か、小作に出して年貢等を差し出した後に残る「作徳」に当ると見られていたようです。

もっとも請け戻しは、幕法によると十年以内に限られていました。しかし当地では八十年後に紛争になるほど緩やかな慣行でした。

また「増し金」といって不幸せ続きなどを理由に代金を追加して行く慣行も広く行なわれていました。三両で売った山畑に対して四十七年間に三回で約十両を加えた例もあ

①（之事）
有合売渡申畑□□
②
右者長安寺脇ニ而上畑三畝五歩・同所ニ而上畑成田

ります。

注意して欲しい語句

じょうはたなりだ　畑の四品等の中で最高の土地生産性をもつとして検地帳に登録してある所を、水田に土地改良転換した耕地という意味。

しょやく・かかりもの　諸役は年貢以外に課される道普請・助郷人馬などの夫役。

掛り物は年貢の付加税で、口米・高掛り三役・国役金など土地（高）にかかる雑税。広義には村入用なども含む。これらを買い主（B）が負担することになる。

とめ（み）きちどの　この文書の所蔵者宮内家では、当時の当主富吉が、池上村名主として家名の太次兵衛を襲名する直前で、差出人がトミをトメと聞き違えたものと見られる。当時は富をウ冠でなく、ワ冠で書く事が一般的だったが、文字面だけをみると留と書かれている。こうした事例は珍しくない。

なお受取人の宮内太次兵衛は池上堰・久野堰・城堀新田等を開いた注目すべき人物である。

三畝歩・下田弐拾三歩、〆六畝弐拾八歩之処、④当寅之御年貢・御上納金差支、代金③三両弐分㊐ニ売渡、⑤右代金慥ニ請取申処実正ニ御座候。⑥然上ハ右畑ニ付、諸役・掛り物等、村並貴殿方ニ而御勤被レ成候。⑦右畑ニ付脇より少茂構申者無ニ御座一候。若脇より何卒申者御座候得者何方迄罷出、貴殿少茂掛一御苦労一申間敷候。為ニ後日一仍而如レ件。

⑧天保十三年
寅十二月

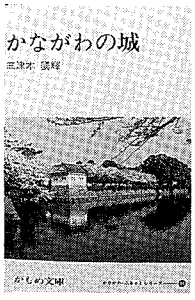
井細田村（A）
⑨売主　治郎右衛門㊞
与頭　伊助㊞
百姓代　五兵衛㊞

池上村（B）
留吉殿

〈宮内義之介氏蔵〉

会員消息

◎三津木国輝さんは、このほど、かもめ文庫『かながわの城』を神奈川新聞社より発行された。内容は県下の城跡、居舘、陣屋など二十五ヵ所について分り易く説明されている。末尾には本文で触れなかった県内の主要城跡、居舘三十一ヵ所を表にまとめ、その所在場所、交通機関を紹介している。新書判一四四頁、価格七〇〇円。



なお三津木さんは、小田原史談会の創立にかかわった一人で、現在小田原市教育委員会社会教育部長として活躍。著作には『大久保忠隣』などがある。

◎山村武彦さんは、この程「画廊物語という名のうちあけ話」と銘うった『一番町画廊物語』を五月書房から発行された。四六判、二二一頁、価格一五〇〇円。

山村さんは、防災器具メーカー優光社を経営、先般『日本経済新聞』で県下随一と大きく紹介されたが、防災コンサルタントとしても活躍。アイディアマンである山村さん、今回は東京に画廊開設、その才智の迸りが感じられる。

◎曽我保夫さんは、本会副会長を勤められているが、本会創立時からの会員で、今迄使用されてきた農器具を大事に保存されてきている。大は荷車、大八車から小は昔使用した蓋つきのビン迄、馬の鞍は二通り、その一つは金具で飾ったもの、小田原に年貢を納めるときに使ったものといわれる。川原の石運びに使った畚も運ぶ石の数によって違う。その材料はアケビの蔓。フジの蔓では何年も保たないが、アケビでは十年も平気で保ち、長い間使用せず乾燥していても一晩水に漬けておけばよいと蘊蓄のある話。ともかく保存されている農器具は、数えきれない程、物凄い数にのぼる。もし、まとめて展示できる民族資料館が出来たならば、寄贈してもよいといわれるが。

紅蓮洞・坂本易徳 ⑮

15の2

岡部忠夫

坂本易徳と同時代の人 関重忠、その父重麿とその時代(2)

前号で記した足柄県の人事について「足柄ニ韮山ムシガ取付テ相模ノ禄ヲ食ヒ潰シケリ」と、『新聞雑誌』(第七十六号明治六年二月)に投書した主は誰だったのか……。あるいは小田原藩(県)時代官員であったが、足柄県では再任されず忿懣を抱く人なのであろうか?

その点関重麿は、佐幕派の前歴のため、小田原藩・(県)首脳の維新政府に対する憚りから、小田原藩(県)の官員となれなかったが、明治五年(一八七二)一月二十八日(陽暦三・二)、足柄県官員として採用された。何が人生の幸への切っ掛けになるか分らない。

関重麿を選考したのは、前に記したように、柏木忠俊足柄県参事であった。

重麿は十二等出任で、職制からいうと〝少属〟、係員の筆頭に当ろうか。

ちなみに、府県官員の職制は、明治四年十一月二十七日(陽暦一八七二・一・七)「府県奉職規則」を廃して、新たに定めた「県治条令」によるものであった。

この条令によると、知事(三等)は府のみに置かれ、県の場合は一ランク下の令(四等)が最高で、続いて権令(五等、府では参事)、参事(六等、府では権参事)、権参事(七等)という順序で、いずれも、太政官辞令による奏任官であった。

(註)奏任官　太政官が天皇に奏上して任命。三等以下七等までの高等官。その後改正により九等までとなった。

足柄県の場合、最初、令、権令は置かれず、参事の柏木忠俊が県の最高責任者で、柏木が権令に昇進したのは明治五年(一八七二)七月、県令に栄進したのは、同七年九月のことになる。

八等以下の判任官は、県令(府は知事)によって任命され、その職階は次の通りであった。

八等　典事、九等　権典事、十等　大属、十一等　権大属、十二等　少属、十三等　権少属、十四等　史生、十五等　出任

(註)判任官　行政官庁の長によって任命され、高等官(親任官・勅任官・奏任官)の下に位した官吏。

関重麿は、明治五年(一八七二)八月十二日付で権大属に昇進したが翌六年十月三十一日付で権中属となった。一見、降格のように受取れるが、そうではない。

明治六年八月四日、典事が廃されるに従い、「県治条令」の一部が改められたからである。

すなわち、典事、権典事が削られ、そのあとに大属、権大属が充てられ、もとの大属、権大属の代りとして新たに中属・権中属が設けられた。他の職名はそのままであった。

この職名の改正は、国の政策や制度の変革と比較すると、調子は軽いが、維新政府の試行錯誤の過程の一つといえよう。

典事といった職名は、明治維新が王制復古の大号令のもとに発足して、やみくもに古い時代ものを取り出した呼称の一つであろう。

典事は、もとは中国唐時代朝廷の礼式や、文官の考課、叙勲それに賜録などを司る職の意味である。

ところが、前述明治四年(一八七二)の「県治条令」が県の業務を、庶務課・聴訟課(司法・警察)・租税課・出納課の四課で分掌するよう定めており、典事の職名がそれにふさわしくなくなっている。

それに大属・少属があって、中属がないとは釣合いがとれない。

また、宮中で奉仕する女官の典侍と発音が同じで紛らわしい。

このような意見が、維新政府の要路者の間で取り交され、典事の職名は削除されたのではなかろうか。

時流の移り変りは激しかった。

それだけに、新政府の基盤はまだ固まっていなかった。

関重麿が権大属となった明治五年(一八七二)というと、わが国最初の近代的教育制度を定めた「学制」を頒布した年である。

新政府は、この年の八月二日(陽暦九・四)、いわゆる「被仰出書」を公布して、「学制」の理念を明らかにしている。

その学問の目的や学校設置の意義について「自ら其身を立て其産を治め其業を昌にするにあり(ルビ原文どおり)、「其身を脩(おさ)め知を開き才芸を長ずるのは学にあらざれば能はず是れ学校の設あるゆえん」であるとしている。そして、従来、武士だけが学問してきたことを否定し「一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の人なからしめん事を期す」という原則に立ち義務教育制度がおし進められたのである。

この「学制」は、福沢諭吉の『学問のすすめ』と同じ論調であり、福沢の思想が大きく投影されているともいわれている。

が、このような功利主義的色調を強く打ち出した「学制」の背景には、西洋

の文物を速かに取り入れ、一日も早く西欧諸国と肩を並べるようにしなければ、そのためには人材の育成が必要である、という考えが維新政府の中にあった。この路線を推進したのは、旧佐賀藩士出身の、参議江藤新平と文部卿大木喬任であった。

一方、幕藩体制を否定して王政復古の形をとった維新政府である。その主体性を確保するために、古代律令制にならって神祇官を置いた。神道を事実上国教として国民の思想的、宗教的拠り所としようとした。この政策を進めたのは、公卿出身の三條実美、岩倉具視らである。

これら二つの路線を巡っての攻めぎ会いは、武家社会の精神的支柱の儒教と、庶民の生活にすっかり定着の仏教とを背景にして、明治十年代まで組織・制度の改変となって揺れ動く。

「惟神の道」では、「富国強兵」「殖産興業」の実現には何等役をしないことは、明らかであった。儒学の教育もしかり。

その点、時代が必要としたのは、福沢が説いた人間生活に役立つ「実学」であった。

「学制」は、全国を十七の大学区制に分割しているフランスの制度を倣らったものであった。全国を八大学区に分け（翌明治六年＝一八七三年、七大学区に改正）、区毎に大学をおき、一大学区を三十二中学区に、各中学区を二百十の小学区にわけそれぞれに中学校・小学校を置くというものであった。

そして、中学区は人口十三万人、小学区は人口六百人を標準規模とした。

もし、この規定のとおり実現されるとしたら、全国に八大学、二百五十六中学、五万三千七百六十小学が設けられる計算となる。

しかし、当時の政府と府県の財政状態からして計画通り実現出来なかった。

足柄県は、東京府を始め関東一円の県と、山梨・静岡両県（現在の静岡県とは異り、伊豆の他浜松県を除く）を加えた地域と共に、第一大学区となった。

そして、足柄県は、相模を二中学区、伊豆を一中学区計三中学区に分けた。

その当初の目論みは、一中学区毎に二百十小学、総計六百三十小学の設立であったが、四百八十一小学に縮小されたのである。

ところが明治六年（一八七三）に足柄県に設立されたのは、さらに減って公立小学校二百五十九校、私立九校であった。神奈川県に合併される、前年の明治八年には、公立二百七十五校、私立四校、その達成率は五十八％であった。（『神奈川県史』通史編4）

一方、神祇官の制度は、その姿を変える過程を辿る。

明治二年（一八六九）七月官制改革で神祇官を太政官の上に置いた。祭政一致思想の現れである。

翌三月一日には、「治教を明らかにし惟神の大道を宣揚すべしと、「大道宣布の詔」が発せられた。

明治四年（一八七一）七月になる、太政官の下に神祇省が置かれ、その長官に卿、以下、輔・丞（共に大小あり）・大禄などの官員をおいた。そして別に宣教師をおいて神道の宣布に当った。

氏子札の制度が出来たのは、この年のことである。

維新政府は、仏教抑制政策をとり、太政官布告で、「大小神社氏子取調」を命じ、この年の九月には、寺院による宗門人別帳（寺請制度）を廃止、住民は生国・姓名・住所・出生年月日と父の名を戸長に届け、戸長から神社への達しにより氏子札を渡し、子供が生れた場合も同じような方法がとられた。

江戸時代には、幕府は寺社奉行を設けて、神官・僧侶を管轄していた。

ところが維新政府は、神職・祠官を神祇官が統轄しているのに対して、仏教寺院は単に、民部省内で取扱われるだけで特別の官職を置かなかった。その待遇は均衡を失っていた。

それに対して、京都・本願寺を初め有力な仏教徒は、その非を訴え続けてきた。

また、明治四年（一八七一）三月、三河菊間藩では、浄土真宗徒三千人が護法一揆をおこした例がある。

政府はそこで、五年三月、神祇省を廃し神仏二道を共に管掌する教部省を置き、教導職を設けた。

教導職には、神官・僧侶をことごとく任命。その等級は十四級に分れ、それぞれに、教正・講義（大・中・小あり）・訓導の職名（いづれも副の意味の権をおく）が与えられ、官吏に準ずる扱いを受けたが俸給は支給されなかった。

教導の内容として定められたのは、

一、敬神愛国の旨を体すべき事
二、天理人道を明かにすべき事
三、皇上を奉戴し朝旨を遵守せしむべき事

の、いわゆる「三条教則」で、教導職の神官・僧侶は、各社寺を説教の場所として、日を定めて、この教則によって広く説教することになった。

『二宮翁夜話』で有名な福住正兄は、報徳の教えを普及するため、この年に神道の一派として報徳教会の設立認可を請け、教導職十二級の権少講義に任じられ、報徳の教えを説くことになるが、説教を聞きに来る人は少く、あまり振るわなかったようだ。

また、「三条教則」が出てから、これを解釈した著書が多く出版され、その数は数十種にも及んだ。そしてこの頃から国体並びに神

道に関する著作が多く現われるようになった（辻善之助『日本文化史』七巻）。

福住正兄も、この時期、明治六年（一八七三）に『富国捷径』初編を、明治七年には『報徳教会道しるべ』を出している。『富国捷径』は明治八年の四編まで続くが、とりわけ、二編、三編は、平田神道に傾倒した福住正兄の考へ方が色濃く反映されていて、その思想を神癖とまでくさす向もあった。

（註）平田神道　平田篤胤（一七九二―一八四三）の唱えた復古神道。篤胤は、江戸後期の国学者、日本古来のものの考へ方を追求した本居宣長のあとに出て、宣長の考へ方を更に強めた。

ところで、僧侶は、神官と並んで教導職に任命されたものの、「三条教則」により、依然として仏教が圧迫される情勢に置かれていた。それに危惧をもった仏教各宗は連合して、維新政府に、僧徒の学習のためにと、中央に大教院を、府県に中小教院の設置を請願した。

政府は、神仏合併の形で許可して、仮に芝金地院に設置、ついで麹町紀尾井町徳川紀州邸に移し、また芝増上寺に移した。それは、「学制」を頒布した翌月の五年（一八七二）九月のことであった。

『明治小田原町誌』の明治七年四月十五日の項に

衆庶教導中教院を玉滝坊内に新設し、松原神社に於て祭典を挙行し神仏各宗の説教あり

と記されている。これは中央の動きに従った行事であった。

ところが、明治八年（一八七五）四月、太政官は、神仏合同布教の廃止を教部省に達し、大・中・小教院は、翌五月始め解散されることになった。

このことについて、『明治小田原町誌』は、同年六月三日の項に次のように記している。

明治六年神仏各宗を合併し、東京芝増上寺に大教院を各府県に中教院を設置し、各社寺を小教院とし衆庶の教導に従事せしを、本年五月神仏各宗合同教院の廃止に依り当町中教院を閉院し其の世話掛も免せらる。

神仏合同布教の廃止の経緯は、佛門側の激しい抗議があったからである。

このことについて、前掲、辻善之助『日本文化史』第七巻には、次のような興味深い内容が記されている。

明治六年（一八七三）一月、紀尾井町大教院の開院式で、大正教の近衛忠房が祝詞を奏上。開講の日には、大谷光尊大教正自ら祭員となって、二礼二拍手一拝の降神の式を行い、ただ神職と違ったのは、衣冠をつけなかったことだという。また同院の大祭では、真宗教徒は烏帽子直垂姿で神饌（神への供へ物）を撤したという。

全く、僧侶は神職に従属して、天台の座主も、真言の長者も永平寺の禅師も、両本願寺の法主も、神官の下位にあって「三條教則」の趣意を説き諭すので、それぞれの宗派の教義は説くことが出来なかった。

また、大教院が増上寺に移った時には、その本尊を撤去して、注連を張り、神鏡を置き、これを造化三神と唱え、朱塗りの山門の前に白木の大鳥居を建てた。わずかに山門の楼上に、最澄、空海を初め諸宗の祖師の影像を掛けただけであった。各宗の管長は、法衣を着けて、神官の後に従い、拍手の打方を習い、袈裟を着けながら神饌を捧げて神前にぬかづくような有様であった、という。

仏教がこのような状況に置かれていたため、両本願寺・専修寺・錦織寺の真宗四山が連合して、神仏分離の願いを提出した。しかしなかなか許可されなかったが、太政官が、ようやくそれを許したのは、先に記したように、明治八年（一八七五）四月のことで、ここに再び神仏分離を見るに至った。

一方、「学制」を推進しようとする時代の動きは、弾みをつけていた。既に明治五年（一八七二）十月、文部省と教部省と同一の庁舎に置いて、両省の、現在の大臣に当る卿を兼任する形をとった。

また、翌六年八月、教導職が、学校教師を兼任することを禁止した。一応形の上では宗教教化と学校教育との分離が計られたことになる。

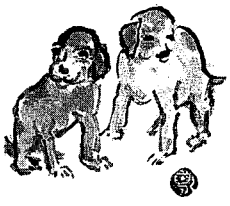
同十年（一八七七）一月、教部省は廃止され、その事務は内務省社寺局に移された。

だが、大・中・小学区制も根付かなかった

明治十二年（一八七九）九月、「学制」が廃され、新たに教育令が公布されると共に大・中・小学区制は廃止された。明治政府は、自由民権運動の高揚に対処して今までの教育路線に大幅な変更を加え、儒教に基づく教育を実施したのである。

なお、教導職は、明治十七年（一八八四）廃され、その職務はそれぞれの派の管長に委託されることになった。

以上は、明治当初の目まぐるしい制度の改革の一例をあげたが、ちょっと長くなったので次に移りたい。



落穂集

◎去る十一月十一日、十二日房総史跡めぐり一泊の旅で、宿泊先の犬吠埼ホテルで、部屋の各入口に「小田原史談会」の表示。まるで小田原の史員グループの親睦旅行の感じ。次いで十二日の昼食は東金市の和風レストランを名乗るドライブインの入口に「小田原史団会」の標示板。ドライブイン側で武士の子孫の集まりと勘違いした訳ではあるまいに。傍にいたS氏「各地に史談会があるから知っている筈なのに、史談会の名を変えるか」と冗談まじりで軽く受け流し。よく考えれば、年輩者には史談会の言葉は市民権を得ているが、二、三十代には縁遠い用語なのかも知れない。恐らく電話で申し込んだ場合、受け手は働き盛りの年輩層で、識字力の関係もあって間違えるのであろう。編者も、領収書に名宛を書かれて貰うとき、相手が二、三十代では必ずつっかかり、すらすら書けない。訓染ない言葉のように思われる。

◎去る十月二十一日(木)、イトーヨーカドーをキイ・テナントとする大型ショッピングセンター「ダイドープラザ」が小田原市中里に開業。小田原商圏に刺戟を与えるのは明らか。

丹沢の植物 ⑱

城川四郎（きがわしろう）

今回、ご紹介するウスギオウレンはオウレンの仲間の一種で、近年その実体が明らかになったニューフェイスである。中国に黄蓮と書く植物があり、漢方で胃腸薬に用いられるので、日本でもその名を知っている人が多い。

しかし、日本には中国の黄蓮と全く同じ種類の植物は分布しない。でも、非常に近い種類の植物があって、それをオウレンと呼んでいる。根のように見える地下茎があり、それが黄色で、ベルベリンという成分を含み、強い苦みがあることも共通している。

たぶん、薬効も同じなのであろう。栽培されて黄蓮と同じように扱われている。日本のオウレンは中国の黄蓮と区別するために、葉の形からキクバオウレンと名づけられているが、それには葉の切れこみの多いセリバオウレン、それよりもっと細かく小さな葉に切れこむコセリバオウレンと呼ばれる二種類の変種がある。どの種類も早春に白い花を咲かせる。

神奈川県内でも、横浜でキクバオウレンが採集された例もあるが、それは栽培品の逸出であると考えられる。キクバオウレンの自生地は日本海側であることがわかっているからである。セリバオウレンは太平洋側に分布するので県内にあっても不思議ではない。平塚にはかなりまとまった群落があり、筆者は確認していないが、松浦茂寿先生は、『箱根植物目録』にセリバオウレンの金時山分布を記録している。

近年、コセリバオウレンによく似ているが、花が淡黄色で、がく片がより細くてやや波を打つ種類のあることが明らかになり、その分布域は富士山周辺であることがわかった。いわゆるフォッサ・マグナ型である。この植物はウスギオウレンと名づけられた。県内では丹沢周辺でその分布が確かめられているが、箱根では報告がない。以前から丹沢周辺にコセリバオウレンの記録があったが、筆者はその確認ができなかった。おそらく、その記録はウスギオウレンのことであったろうと推測される。花のない時期に、葉だけを見てコセリバオウレンと区別することは不可能なほどに酷似しており、ウスギオウレンをコセリバオウレンであると判断されたとしても無理のないことであった。

オウレンの仲間は何れも開花期が早春で、三月から四月初めまでしか花を見ることができない。

ウスギオウレン（らんきんぽうげ科）
Coptis lutescens tamura

筆者原図

小田原史談会諸行事等

房総史跡めぐり

平成五年十一月十一日(木)～十二日(金)。七時、大型バスにて小田原駅前出発。翌十二日五時帰着。

〔コース〕一日目(雨)、大井松田I.C－海老名S.A－レインボー・ブリッジ－市川I.C（弁当積込・車内昼食）－成田I.C－栄町・千葉県立房総風土記の丘（国指定史跡岩名古墳・国重文学習院正堂・再現江戸時代商家屋並）－下総町・滑河観音－佐原市・伊能忠敬家・同記念館－香取神宮－銚子市・飯沼観音－銚子漁港前（買物）

――犬吠埼・ホテルニュー大新泊。二日目(晴)、地球の丸く見える展望館－芝山町立芝山古墳・はにわ博物館－芝山仁王尊観音教寺・国指定史跡殿塚・姫塚－東金市・ドライブイン（昼食）－国指定史跡加曽利貝塚・千葉市立同博物館－市川I.C－湾岸高速道

〔費用三万円〕

〔参加者〕（順不同敬称略）

富田千春、和田登・ヤス子、飯田悟郎、岡部忠夫、瀬戸崎雄、天野宏、杉山竹二・房江、山口一夫、小田中正二、曽我保夫、吉池清、田中種久・まち子、小栗良英、剣持房枝、山口広子、石塚舜三、杉浦恵二、佐々木正孝、森サク子、栗山清子、河本登志、江口登百子

以上二十五名

俳句

和田　登仙

。房総風土記の丘

房総のむら古き生活冬めける

学習院正堂の庭草紅葉

。滑川観音

小春かな湧く水なめよと観世音

紅葉散るしめ縄太き仁王門

。伊能忠敬記念館・香取神宮

江戸の舟着きし佐原や冬薔薇

黒漆檜皮の大社時雨けり

。銚子

冬の海銚子観音はとっぱづれ

犬吠の灯台光り冬うらら

冬浅し水平線の丸きかな

。芝山古墳・はにわ博物館・芝山仁王尊

冬ざれや生ける眼の仁王尊

芝山や殿姫古墳の朽葉ふむ

。加曽利貝塚

加曽利貝塚北も南も草紅葉

ぎっしりと積む貝塚や冬ざるる

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
小田原銀座 アオキ画廊
熱海 アオキクリニック
足柄香粧株式会社
飛魚屋
紳士服の アメリカヤ
画材 ガクブチ Vのうえ
伊勢治書店
伊豆箱根トラベル 小田原営業所
かまぼこ
南足柄関本 おぎの整形外科・歯科
税理士 公認会計士 小澤重治事務所
株式会社 小田原魚市場
小田原ガス
小田原市農業協同組合
小田原報徳自動車
株式会社 オートセンター・スギヤマ
(共)小田原中央青果 株式会社
オリオン座
かまぼこ 籠清
金寿苑
鐘紡株式会社小田原工場
カネボウ化粧品鴨宮工場
神尾食品工業 株式会社
木地挽 日下部産業 株式会社
かみやま小児科クリニック
興電社
小伊勢屋
(有)小松石材店
さがみ信用金庫
趣味のごふく さくらい
宝飾専門店 JEWELRY Shimano

正栄堂
中華料理 昇玉
杉山水道工業 株式会社
鈴廣かまぼこ
石寿堂スポーツ
大営不動産
割烹 おるは
そばそ 二宮
茶半家具株式会社
ちんぎう本店
土谷建設株式会社
角田ガクブチ店
東京電力(株)小田原営業所
株式会社 東華軒
トーホー建物 株式会社
八小堂書店
八ナマサ
平井書店
富士写真フイルム 株式会社 小田原工場
株式会社 報徳
栄町 松坂屋
学生専科 (丸)マルク
食器の店 マルサンストアー
みつゆき設計
諸星運輸グループ
株式会社 美濃屋吉兵衛商店
みみづく幼稚園
ヤオマサ株式会社
山口菓子舗
株式会社 ユアサコーポレーション 小田原製作所
防災器具 優光社

小田原史談（年四回発行）
年会費 普通会員三千円
振替 横浜(2)六四三三六
小田原史談会会員部